The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 194. NEW YEAR'S DAY. 1890.

第百九十四號目錄

恭賀新年

社員

巖本善治

木村祐吉

山田三十郎

森田豐

井上藤平

堀口章三

竹中松三

八木鴿二

長島熊太郎

客員

渡瀨寅二郎

寺尾熊三


花蹊女史寫

○御婦人の胸中

問 一年の計事は春に在りと云ひ升、此の一年は如何しましやうか。

答 何よりも先づ少し學問を爲さつては如何です。

問 學問は勿論したいのですが、此齢では學校にも參られませず、獨りでは稽古も出來ませぬゆえ當惑致し升。

答 ナンノあなた、夫には至極よい手立があり升。

問 學校にも行かず、教師もなくて、學問が出來升乎。

答 其の手立は唯一の、通信女學を御覽なさるのです家の用事を爲ながら、獨りて稽古が出來ます、一年御奮發なさつたら立派な學者にお成なさりますよ。

今年學びずして來年ありと言ふこと勿れ、今日學びずして明日ありと言ふこと勿れ。過る一年は夢の如し來る一年いざ勉強せん。人生れて學者なし若し學ばゞ何人も學者となる。萬物の靈たるは智慧あるに由る智慧は學問なき人に宿ることなし。機會は額に毛ありて後ろには無き頭の如し、一と度び前を過ぎしむれば復た捉らへ難し、決心は今日、今日に在。

學問隆盛の今日、女學の進歩一と方ならず、凡そ年頃の娘君にして奮發學に就かぬは最と〳〵少なく、既に一家の妻となりし方にても晩學の勉強をさ〳〵年少の人に劣らぬも多し、概して何處の婦女子も皆な學問と云ふことに心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬると明治の代の恩澤にて有がたきことと云ふべし、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も玆に入學して日々の進步目覺しきこととなるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出で通學することも出來ず又家に教師を引て教を受るも甚はだ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古する工夫なきか又獨學に便利の書物はなきかと屢ば問合せあり、吾社嘗て女學雜誌に附して通信女學を出版したるは全く此類の需に應ぜん爲めにてありしが、女學雜誌の進と共に此の附錄を中止し追て別冊に仕立て發兌すべき樣兼て廣告致し置ぬ、今や其準備相整ひたるに付來年一月より左の方法によりて毎月講義錄一冊づゝ發行可致也。

毎月二百頁程の講義錄一冊宛出版し毎日四枚(八頁)宛讀み一月にて終る筈の事

毎號教授の科目、枚數、及教師左の如し、

科目	一年枚數	一月枚數	教師
萬國史	四五〇	三八	明治女學校教諭 木村祐吉
日本歴史	二〇〇	一六	同 鈴木弘恭
算術簿記	一〇〇	八	同 磯貝由太郎
理化學	一〇〇	八	農學士明治女學校教諭 寺尾熊二
生理學	一〇〇	八	同
動植學	一〇〇	八	同
作文法文例	二〇〇	一六	鈴木弘恭
歌詠方	五〇	四	同
和文讀本	三〇〇	二四	同
漢文讀本	三〇〇	二四	明治女學校教諭 八木兼辰
家政學	三〇〇	二四	醫學士 三島通良
衛生、育兒、看病、料理、及裁縫女禮を合す			
圖入地理	一五〇	一二	寺尾熊二
英學	一〇〇	八	山川新二郎

右諸科目は何れも獨學に差支なき様記るし置くと雖ども尚疑はしき條ありて質問を寄する者には各科の教師より夫々鄭寧に應答すべし

一年にて右諸科目を終る、此丈けを心得れば普通一と通りの女學は學び得たるとにて文明なみ〳〵の交際に差支を生ぜず若し此丈けをだに知らねば今后二三年の内に婦人仲間中以上の交はりにも列し難きとあるべし。

女學雜誌は其時々に切要なる女子の心掛を論じ通信女學には永久女子に入用なる學問を教授す其二つ乍ら欠く可らざるは食物と着物の如し、女學雜誌は四季折々の必要を足し通信女學は年中同様の必用を足す、故に二つを合せ御覧にならば一層に便利なるべし、編者も亦其心掛にて編輯し相合せて錦と花との如く爲さまく祈る、左れば右二つを合せ購讀の人には特別の割引を可致也。

通信女學一册前金三十二錢(無郵税)、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れば發送せず。

女學雜誌一册六錢、十册前金五十八錢(府外は此外に一册五厘宛の郵税申受く)、而して通信女學と双方購讀の方には各一割づゝ相減じ可申也。

明治二十二年一月十日第一號を發兌し、二月十日第二號を發兌し、以后毎月十日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

東京富士見町 女學雜誌社

女學雜誌　第百九十四號

明治二十三年一月一日發兌

社説

○元旦夙朝の感

寢ねたるは去年の夜なり、起き出しは今年の朝たなり、扨て眠りし間だに見たる夢は去年にてありつるか將た今年にてありつるか、之れを思ひ惑ふて止まず。夫れ眠れるが故にのみ此の區別の判ちがたきにも非ず、たとひ目さめて除夜の移り行きに掛念したらんとも、舊年逝き新年來るの境界に至つては確と見定めがたきものあり。往來しげく、わかし眞晝の如く、提燈火の粉を散したる樣にて、家の内外只だ何となく騷々しきは大晦日の宵の景色なり、更ふくるに隨がひ四面些さか靜まると云ど、心地の定まらぬゆえにや世間尙ほ夜とは暮れぬ思ひす、一歳の計算正に了り、今年の用事早や殘なけれど、之と共に來ん年の事の思はれて心息ふとを得ず、暗氣沈々として燭しび細く、年は將に葬られんとすれど、時を同うして勇ましき感じ追々に湧き出で、引く水と差す流れと相混じて去留の何れたるかを辨じがたく、夜の最と深く熟するとき朝たの風既にそよ〳〵と吹き出で、去年を埋むるの鐘悲しと聞く間に快ちよき曉の鐘とう〳〵と鳴り出づ。嗚呼去年今年の岐るゝ所ろ何處にありや、曉鐘の快ちよく鳴れる以后即はち新年なるか、左らば其鳴らんとする以前の勇ましき天と風とは舊年のものか舊年何を以つて斯く樂しき、然らば除夜の眞中を以て新舊の限りとせんか、一つの算盤も二た年に跨りて加減され、一品の談し合ひも去年今年に渡りて相談せらるゝと云ふは何如にも奇しきものなり、左らばたとひ此の一と夜をよし刻々に注意するとも、除夜終り曉つき始まるの境ひに至りては茫として辨じがたし。

其の境界は辨じがたし、左れど其の相違する所ろは最と明白に知らる。昨夜は獨り嘯ふきて一歳の過越し方を顧りみ、われ當初心に約束したる事其幾千を成し遂げたる、日を費やせると三百六十余りにして得たる業は抑も何程にてありける、裏耻かしと思ひてし業は今尙ほ新らしく記臆すれど善事を爲せしとの樂しみを覺ゆると最と〳〵稀れなり、嗚呼われ如斯く月に年に罪を重ねて、たゞ重きを荷なひ死に近づくべきか、歳々年々代り來りてわれは元の如く、尙ほ時としては元ありしよりも惡しゝ、斯ては人生の功年を經るに於て何の益あらんと思ひ、嗟歎痛恨して胸を打ち涙を垂れたるは僅かに一

と時二た時の前なり。然るに鐘響き、烏鳴き、天破れ、太陽爽わやかに東に登り、新年笑つて來れば、陽氣滿地に充ち渡りて山川草木みな歡こび叫ぶ、われ亦安んぞ樂しからずしてあるべき、心うき〱として氣大きやかになり、四面何にとなく喜こばし氣に見へて、鬼も尙ほ手を握らんとして來る心地す、此に於てか或る人は屠蘇を傾むけ、或る人は雜煮を食べ、陶然として鼓腹し、歌ふて曰く、樂しひ哉、舊年は既に追ひがたし、新年は當に爲すとを得べし、われ今年こそは斯々の事を爲し、斯々の業を畢え、斯々の務を果たすべしと、意壯んにして前途極めて望みあれば、豫じめ約する所ろもすでに手に入れる心地し、樂しみいよ〱增して快哉言ふ可らず、今日今朝は實に人生の春、永生の曙なり、未だ智慧の木の實を味はず事の難き易きを知らず、未だ働らかず額いに汗するの苦勞を思わず、花笑ひ蜜流れ、今日は眞とに人間最始のパラダイスに在るの思ひするなり。新年如此く樂し、如何にして舊年の鬱如たるに比すべけんや、特に昨夕を以て今朝に較ぶれば、相ひ逢ふ所ろ天國と地獄の如し。

扨て今年は帝國議會の開くる年なり、古しへ上宮太子は其憲法第十七條に約して、凡そ政治は公衆と共にし輿論に聽くべしと定め置きたり、代々の變遷を經て事必ずしも常に如此くにてはあらずと云へど、凡そ政の維新ある每には其都度此の大法折々に發輝して、帝德の一層に現われずと云ふとなし、今上皇帝御一新の政府には、先づ公議輿論を重んず、その御主旨第一に布告となり、爾來廿餘年の御仁政は一々着々として其方向に進み、本年は即ちいよ〱國會の開かるべきの時節とは相成たるなり、之れ陛下多年の御志しにてはありつれど、其御志の直に現はれて民に政事を任せ玉ふ第一の實跡を見るは即ち本年を以て初とはする也、本年は實に陛下の御招を蒙り、之に應じ參らせて吾々臣民の心を代表する議員を差出し、御前に於て憚かる所なく利害正否の考を申上げ、陛下万一の叡慮を裨補し奉まつらんとする、君臣共和政府の最初を爲さんとを試むるの年なるなり、陛下は斯あらせんとて樣々の準備を吾等臣民の爲に設けさせ玉ひ、步々其の序でを履みて遂に今日に至らしめ、初めて吾等を御前に招き玉ふとを得るの進步を得せしめ玉ふ、吾等は即はち高恩を戴だきて其の御堂に集つまり愚ろかなるは論なしと云へど初めて考ふる所ろを天聽に達し、普天の下一個半分の民の心も御見聞に屆かで畢るとなきに至らんとは爲す、吾等は今年より陛下の識

事堂に入るヿを得るなり、政治上に於て本年より初めて陛下の御家僕中に加へられしなり、本年と云ふ今年は斯く計り樂しく、うれしく、榮えあるの年にてあるなり。

左れば本年は爲すべきヿの極めて多き年にて、亦た隨つて用意するヿの甚たく多かるべき年なり、之を以て政事家は政治上の掛引の爲めに、事業する人は事業上の目論見の爲に、敎育家は時勢變遷に應ずる爲めに、宗教界の法師は人心急變に適わん爲めに、其人異るに隨つて力を盡すところ同じからず、但だ熱心盡力して今年こそはと覺悟するの決心に至りては万人皆な優劣あるヿなし、老ひたるは今年を死出の名殘にとて花々しく戰わんとし、少きは今年を初陣の門出として勇ましく戰わんとし、靜かなる人も今年のみはとて色めき出で、壯んなる人は今年働らかずしては何時働らかんとて勿論騷ぎ出んとす、苟くも志あらんものにして今年寂として山寺に隱れ寢ねて覺めざる如き人果して何處にやある、われは其決してあらざるヿを斷信するなり。

然らば女性と云へども亦た、今年は其餘程の覺悟を爲すべき年にてあるべし、其良人もしくは息子兄弟にてあらん人々は本年初めて國會議員と云ふものを撰擧するの役を得たり、又中には自から其の議員と相成るべき務めを負ふヿあるべし、女性は固より直接に此等の事に關はるヿ少なしと云へども、間接に遠く之に關はるの事は決して少なしと云ふ可らず、凡そ女性が其良人もしくは息子兄弟の爲に内助せんと欲するには、亦た幾分か外に於けるの景勢をも知らずはある可らず、人を慰さめんには先づ其人の心を知るを要す、故に外に働らく所ろの人の心を慰さめんと欲せば、亦た先づ外に於て其人が如何に難義し、如何に苦勞するやを承知せでは効なし、苟くも斯く承知せんと欲するには勢ほひ亦た外向の景情を知るヿも大切とはなるなり、男子は外に於て心を張り裂く計りに心配し、扨て家に歸りて之を話し、話して幾分の慰さめを得んとするも、家人悉く外事に暗らくして些さかも話しの調に合わざる時に於ては、彼の難める人は最早や根底より一々講釋するの辛棒を得せず、鬱情更に鬱して酒を飲むか外かにて遊興するか但だしは酒の忘れ藥を以て辛くも苦心を外部より壓さへ付んとす、此に於て酒に身躰を破り情慾に一身を落すの基ひも生ずるヿとなり。若然るヿなく、最初より女性に於て之に思ひ遣りを寄するの智識あり、能く其の情を察して之を慰さむるの覺悟ありたらんには、彼の世間に於ての難み手は家

に於て安樂を得、幸福十分にして初めてホームと云ふもの丶樂しみに滿足すべし。苟くも若あらんとせば女性先づ外向のことをも可なりに承知致し置かずばある可らず、女性が外向の事を學ぶは之をして男らしくあらしむるなりなど掛念するものもありと云へど、此は思ひ至らざるの愚論なり、女性をして亦た外向の事を知らしむるは之をしていよ／＼女性たらしめ、以て其の女德を十分にするものなり、左れば時勢の遷り變り、國家の大異變、大事件、などに至りては是非とも一應の心得なくしてある可らず、今年の如く總べての男子が初めての國會年代に會したる時に當りては、女性も亦た相應に國會などの事を聞置ずばある可らず、男子が之に付きて樣々に盡力することありと云はゞ、之に隨ひて女性も亦た樣々の事を聞見し置くことを要す、此の一事の如きは、今年に入り、女性が特に用意すべき事の新らしき準備にてある也。

其他、年ごとに覺悟すべき一年の計事、一身それ／＼に連れて覺悟すべき本年中の計畫などに對しては、言ふ迄もなく今日に於て確かと決心すべし、物事はすべて其の初めを大切とし始めに於ては其の決心を肝要とす、特に多事多用にてあるべき明治二十三年の爲めに、今日一歲の元日に際しては、諸君が深く心を定むべきの箇條、頗ぶる多し。

左れど、今日終りて亦た明日ありと言ひ、今年過ぎて亦た來歲ありと言ふと勿れ、苟くも事を輕忽にして務めを后に延引するに於ては、たとひ十百の年を重ぬると云へども遂に事を成し畢んぬること能はず、今日を元日なりと云ひて暴りに費さば、明日は二日なりと云ひて亦徒らに送るべく、三日は亦三日なりと云ひて同じく空しく暮すべし、斯の如くならば七日は人日なり、十五日迄は正月なり、一月中は遊ぶべき時なりと見倣し、二月は尙寒しと云ひ、三月より彌よ着手せんと云ひ、四月五月は花の時一時なりと云ひ、六月に至つてすでに半年を失ひ、慚悔して發奮するとき既に七月になり八月となり、寧しろ暑中を過してのちと云ふまゝに、最と物さびしき秋となり、彼此れ苦吟するうちに、早くも十一月となり、十二月ともなり、最早致方なし來年より改ためて勉強すべしと云ひて空しく待つ間だに、恰かも一週して即はち昨夜の如き除夜の經驗に罹れ、玆に於てか大ひに泣き悲しみて來年よりはと奮發興起したれども、一と度び新年に入りて事樂しげに見ゆるときは又々前の如く浮れて同一の轍を繰り返すならん、嗚呼もし如此くにして一生を送るときは、人に老少賢愚の別ち

あるなし終生たゞ生れ出でし儘の如く小供心地を以て同一をくり返し卷き返して、扨て空焉朝露の短命を畢るなり、悲しきと幾千ぞや。

故に人よろしく來ん時を空しく待つとなく、只管らに現在を重しとすべし、吾等が確かに生きてあるは只此の今日にして今日の中の正に今の時にてある也、此の今の時は吾等が確實に生存して嚴重に義務を果すべきの時なり、此の目前の時の爲めに若し盡すとなくば如何で漠然たる來んもの〻爲めに力を盡すとあるべき、死したるものは宜しく葬むるべし、左れど未だ生れざるものは賴みにするとなかれ、吾等はたゞ現在を賴みとす、來年にはわれ生くるや否やを知らず生けるは即はち今時なり、今年一歲われ生くるや否やを知らず、生けるは即はち今月なり、今日なり、今時なり、今時の外何時をも賴まじ、現在は吾等が立ち、生き、働らくの時なり、乞ふ人〻よ、徒らに未來を想ふて現今を輕んずる勿れ、今年の次に來年あり、今日終つて明日ありと言ふとなかれ、昨一年の空しく過たるを見れば今一年も亦同じく過ぐべし、昨一日の知らぬ間に過たるを思へば今一日も乍まちに過ぐべし、而して昨夜と今朝との大なる相違を思へば、一と日と云へども千秋の感なきにあらず、万年の心地皆必しも之に違ふとせん、左らば一日と云へども決して短きに非ず、夢をろそかにす可に非ず、嗚呼誰れか生命を寸陰も伸べ得んや、明日の事は明日に於て思へ、一日の辛苦は一日に於てすべし、諸君決心せよ。

批評

○當世文學の潮摸樣　ほさゝぎす

春の舍の隱居書生氣質を著はし都會の文讀む者の眼を醒ましてより文學なる者世の問題となれり。寶玉も砂利も同じく新聞紙上に躍り出で廣告に雜報に衆目を眩惑して忽如小說熱をして日本の天地に炎々たらしむるを致せり、雪中梅は空前の大著述と賞へられ佳人の奇遇は世界の一大奇書と稱ぜらる著名なる平民主義の代表者も言文一致の代表者も皆な此際に起りけり、裸美人出でゝ少年才子志を得色懺悔は又他の秀才を世に現したりS、S、S、連のおも影は白龍天の一方に躍るが如く、宿村のむら竹も亦た一世を風靡せしむるに足れり。吾れ能く飲まば太白を浮べて邦運の斯に進めるを賀し文豪の輩出せるを謝せざらんや。唯だ然り、然れども余は怪しむ所あり、斯く迄は進み來れる文運が如何にも怪氣ある方向を取

て倘ほ步武を早めんとしつゝあり、通津果して何れの處ぞ、汝が足は遂に何れに至りて止まり、何れに至りて馬首更らに他方に轉じて趁らんとするや。美くしき文學よ、艶陽三月芳蝶花を蹴つて庭前に戯むるゝは汝が今日の狀態にあらずや、多才伸べ餘まして少年大名を成し、一世を睥睨して文壇の上俯にたへざる火の燃ゆるあり。吾れ公等に祝す、公等何んぞ斯くは望み多き。然れども密かに文學の歷史に徵し、其の潮流を驗らべ而して後今日の文學を顧りみ余は多少疑惑の念の生ずるなき能ず、案を拍て自ら難を說いて曰く、當代の文學は有望得意なる歡樂者の爲めに盗はれつゝあるあり、余公等に歡樂者の號を奉りし、是れ或は受くるを嫌はるゝ向もあらん、然らば余再び數語を連ね試みに是を解釋して見ん。

彼等世外に超然たり、世外より世內を見ば紅塵深く重りて厭ふ可き者多し、是を侮る可く嘲る可し否な寧ろ放蹴す可し。好し吾は世界の外に堅城を築き是に安操して何の憂る所煩ふ所もなかる可し、彼等何をか悲しむや將何をか苦しむや我は獨り世を傍觀して興ずるに餘りあり。人間の事何ぞ必らずしも深く問む、最大主眼は今日にあり、いでや彼等に吾が大智囊より人情の道を敎へん、愛戀の哲理を授ん、希臘の古哲學を歐米の新理想とを筆に任かせて示しやらん。公等の理想斯の如くにはあらずや。

篁村氏の小說常に世を刺すが如と雖、醉後興に乘ずるの筆と見ば可ならむ、紅葉氏古風に人情を寫さるゝ事巧なれど巧妙唯だ巧妙の價に止りて他に一の特種なる光を見出ず、滿文界の文士何ぞ多才なる、能く愛情の哲理を觀破して綿々たる小說を綴の妙を得たる事眞に驚に耐へたり。宇宙の大觀は愛戀より大なる者なし、是を極むるは小說家の本領なる可きも、余は未だ小說家の本領悉く爰に止まるを知らず。文字の英雄は兵馬の英雄と異なる所なし、四海を飲の膽は愚か、宇宙を盗ふの大觀念をなすの力なくしては文字の英雄とはなり難し。跼蹐として天地の小部分を端睨し徒らに文字に錦繡を重ねしむるは文字の人の爲す可き業あらんや、知らずやポープは是を以てアヂソンの下に坐せり、スウヰフトは是を以て別天地の大王となれるなり、然どもポープすら倘間々、慷慨氣骨あるの句を成す事あり、當代の文豪指を屈し來れば文字の能くポープに勝る者あれども氣慨果してポープに達る者幾かある。思へばミルトンの出でたる豈偶然ならんや、公卿侯伯半ダース

の妻を貯はへ一ダーズンの兒女を持たざるを恥づる世にありてミルトン豈に偶然にして出でんや、明を失ひ椅子に拠り、僅に余何をさゝやきては娘子の筆をとりて一卷世に傳ふる者は如何なる書ぞ。壯麗なる都府も蕭條なる森林も幾度か其跡を絶ち其影を失ふ者なからめや、獨り書は五年は五十年の子孫を増殖し、五十年の子孫は將百年の子孫を起す可し。誰か帝王の一代に奉戴せらるゝを知らざらむ然れども書は是れ數十若しくは數百代に奉戴せらるゝ者なり然も靈魂を以て從はるゝなり。又た彼のホイチイアを見よ、滿卷奴隷の爲に流せる紅涙にあらざるはなきにあらずや、天質に要す可の人を知る時の要する所を離れ人の慮りて充たす事なからめや。英雄の起る偶然にあらず、詩人の起るも亦偶然にあらざるを疑ふ勿れ、余は怪みに堪ざりし、何故にか余は當代の文學に滿足せざる、曰く唯時に過ざるの文字多きを見ればなり。今は得意の月日に非ざるを彼等は得意と思ひて歡喜の筆を弄す、今は慷慨する者を要するの日なるに彼等は笑談すれども一滴の涙はあらず、片々積來るの文字は寧ろ時流に媚んとするに近からずや、然らざれば將自家の歡樂を表露するに止るか。嗚呼此の如くんば文學の眞味何處にかある、去とては「レ、ミザレブル」を書ねとは言ずデパイン、コメデイを吟し出よとは申さず、パラダイス、ロースト は更の事なり、然れども誰か時代を慮るの小説家詩人は無や滔々たる文學家中何ぞ一滴の涙(新著連の涙とは異れり)を眞に國家の爲に流す者なきや。彼等の文字何ぞ豐富なる、美麗なる、然れども我に於て一回も感情を動かさず。却つて怪しむ多數の文豪何を求めてか汲々たる、功名か、虚利か、然らざれば將比伯落中のロード、カヂユーアスがペチシヤを罵つて爾來女人こそ我玩弄物ならんと言しに似る感情あるや、然らざればヲフエリヤを突放つて水の如く潔く、雪の如く白かれ、行け汝が尼寺の路に急げと言しハムレツトを學ばんとするにあるや。多々益情界の名聲を擧て遂に果して何を捉へんとする。嗚呼少年の才子よ、文學の眞味茲にあらず、天下大に公等を待つ所あり、放縱に誤る勿れ望長き文豪よ君が世界は今代にあらずして未來の他の時代にあり、君が名譽と權威とは蹟跡として少數婦人の間にも、一代衆盲の中にもなくして無限無際涯たる未來にあり。カーライルは君が確かに未來に於る英雄の第一級に位ひす可を保證せり、兵馬の鬪爭止て平和なる筆頭の劇戰起は天も亦心して然らしめけん、嗚呼愛する者よ願ふは余をして

再び公等を歡樂者と呼ばしめなよ心あれや心ある者よ、天下は公等に頼りて救はれんとす當代文學の潮流與に變ふ可き者あり、刮目して爾後の傾向如何を見ん。

○漣山人の「梢上月」

XYZ

前に嵯峨の屋主人の「くされ玉子」を讀んで其文字を不道德なりとて憤慨し又は其非實を不道德なりとて激昂したる幾多の人は今此「梢上月」を讀みて憤懣も激昂も消失せて復活したる心地たるべし。嵯峨の屋主人は信者を統ふ道德界の惡魔の實相を正寫して世間盲眼盲心の徒に過まられたり。漣山人は流石に今日の愛敬作者と曰はるゝだけありて、尋常に世間盲眼盲心の徒に惡魔なりと過まらるゝ道德訓論のアンジエルを寫せり。前者は惡を寫して信者を反省せしめ後者は善を寫して未信者を慚愧せしむ。取る處全じからずして期する處共に全じく間接に——直接に基督教の感化を説けり。基督教徒謝せずして可ならんや。

人間は總て罪惡あるものなり、罪惡あるの人間何ぞ罪惡あるの人間を鞠くを得んや。故に姦淫を行なふもの貪婪るもの其他總ての罪惡を犯すの人あらばキリストの能に依りて悔改めしめ神の救を得せしめんとす、是れ基督教徒の奉ずる處にして「くされ玉子」著者の意も是れに外ならず、何ぞ殊更に他人の醜惡を暴露して以て快とする者ならんや。

漣山人は實に基督教の命ずる處に頼り、ヒポクリツトがいまはしき風説も虚に乘ぜんとするサタンが努力も道德の堅壘を侵しがたき活例を寫したるなり。神の惠に浴する信心無二の兄弟姉妹は此一篇を讀みて、かの「くされ玉子」著者の意を悟らで基督教攻擊の好材料と心得たる惡魔の敗衂を見たる心地して、更に神の惠を感謝すべし。末段

「(上畧) われ偏へに教のため、譯しらぬ人をつまづかせじと、思ふ心の眞實のみ、「我れ」と云ふ者此間になし夜風もいまは定まれば、心もすみて更に清く、眞情こめし祈禱には、などて耳を傾けざらん。天に在ます吾等の神!」

の一句の如きは實に聖經の文を腦裏に蓄へて出せしものと云ふべし。彼得前書第四章に曰く、

「(上畧) 愛する者よ爾曹を試むる火の如き苦を非常事の如くして爾曹異しとする勿れ、却てキリストの苦に與るを以て歡樂とすべし然ば其榮の顯れん時また爾曹喜び躍らん。若しなんぢらキリストの名の爲に謗られなば福なり蓋榮の靈すなはち神の靈なんぢらの上に止れば也(中畧)若しキリステアンたるに因て苦に遇ば羞ること勿れ却て之に縁て神を崇むべし(中畧)もし義者辛じて救はるゝを得ば神を敬はざる者と罪人は何處に立んや。是故に神の旨に從ひて苦に遇ふものは善を行ひて其靈魂を信ずべき造物者に託すべし」

是れ基督教徒が常に服膺して確と動かざる教示なり。お愛が「此世の人には彼是云はれても、天に居ます神樣の前には露恥づることはございませんつもり……。しかし此世にある限りは、どこまでも御榮を現はしたく、それればかり始終心に掛けて居りまする」云々の詞は基督教熱信の女性の口ならずして出づべきにあらず。わが飛兄姉の中よく是と全じき境界に遭逅し是と全じき感情に沈みたるの人も多かるべし。混沌たる濁世界に生息する人類の毀貶を意とする勿れ……神の靈はわれらが上にとまれり!。

宗教上の信仰より小説を作りし人古來多くして其感化する處少からざりしに今の文界其人なく、世の濁れるを厭ふて獨り清からんとする人は滄浪の水洗ふによしなく、天路歷程外に小説なしと迷へり、文界の人誰か笑はざらんや。然るに今この基督教社會に這般清淨無垢的の小説及び漣山人なる一勇將を得たるを賀す。初めに譯とあり、原作者はゲーテにもせよ誰にもせよ、結構最も凡なり。大小の瑕瑾は暫らく云はず、唯縱令ひ進步せざるものにもせよ、所謂意匠清潔道念純厚の小説を得たるを喜ぶ。もし是をしも不清潔不純厚と曰はゞ、果して何ものを指して眞の清潔純厚と目すべきや。五千年に遡つてエデンの樂園を尋ねんか但し

永眠して天堂に案むべきか。

「棺上月」は去年十二月二十日發行基督教新聞附錄にあり。主人公は未信者の妻——穿ろこゝなき柔和恬靜なる筆をもて粧飾させし信心堅固の妻なり。

○紅葉山人の「初時雨」

A・B・C・

「初時雨」——此外題で此作者と聞ては秋風に啼く猿も小蓑を欲しくなり檜木笠被りて命をからむ木曾の棧橋より鳰のさゞ波浴する志賀の海から奥の細道までも頭陀袋首にぶらつかせたくなる邃サ加減…(何だエ?道中記かれ」。典具帖の袋を恐る〳〵取りて表紙を見れば麗なもの、そゞろに七歳の昔手箱の底に秘めし小倉百人一首の袋を思出されたり。扉を見れば色紙形、さてこそ柿本人丸か山邊赤人か……目を拭ふてよく〳〵見れば、御自筆のちらしがき、いつ見ても美はし。書捨の反古さへ手に入れたるものは是を元結にして「紅葉風」とて近頃の流行(ホイ是はしたり叱ッ〳〵)。さて一番に「駿馬骨」、豪氣に澁い外題だノ、たしか元祿頃の書目にあつたッケ。目に附きし秀句はなけれど一頁二頁はすべてうまきものなり。おさは? 勿論秀句づくめ、讀ますとも作者は紅葉山人……是で澤山。

二番目「江戸水」、見て知れ三馬とどッちだらふ……と云ふ作者の見識なり。まづ梅翁の句にびッくりし、‖行春や押上のむら‖にびッくりし、‖白蛇出づてふ柳嶋‖にびッくりし、終に‖すかぬ語呂ときこれ‖に到り楓里子に先んじてひッくりかへりたり。「客者評判記」の桟敷はりの書抜に「にはかにだまつて衣紋つくろひ‖エヘン〳〵○山鳥子大分ながい幕だの」とあり。三馬とどッちだらふ?。

第三番に「口惜しきもの」名文名想。是ほどの名文を「文庫」に埋もらすも口惜しきものとて初しぐれの一粒となつて讀者に寺子屋の昔を忍ばさしめたり。

四番目に「文盲手引草」。文盲問ふ、何の事だナ? われすまして曰く、紅葉洛作從來妙也。

眞打は「戀山賤」。云ふも野暮…壓卷。

露伴先生の評紙背に透る、是ほどの景物とこの勸工場の相場狂はしてもくれまじ。唯精細に感服するのみ。

論説

○女學雜誌を祝す

木村熊二

柳眉花貌曙の如き姿を裝成したる時は五陵の年少も爭て纏頭し綠葉陰を成して春は昔となりぬれど自ら芳を尋て遲きを恨む人やあらん秋娘に妬まるゝ程の容色も老ては誰が顧ることをせんむかしがたりに遺しつる一曲の琵琶は江州司馬の青衫を濕すに過ぎずこはそも唐代の佳人が薄命の生涯を想見するに足るべし歐洲文明の社會には二八の春光は未だ爛熳の時と見做さずして專ら智識を開發する教育の時間と爲り人の母と

なりたる頃は百方處世の經驗を重ぬるの時にして漸く人に貴重せらるゝ事を得新霜は數莖の雲鬢を染め秋波鏡面にあらわるゝ頃より婦人の最も社會に敬愛せらるゝ事とはなりぬ女學雜誌が明治の新天地に生れ來るや唐代佳人の薄命ある經歷を慕倣するものにあらず歐米文明の宗教に薫陶せられ志として男尊女卑の說に牴抗して婦人の品位を尊めんには德育智育の第一着手ある事を看破し女子敎育の途を擴張せん事を勤めたり當時其の欄內に揭載せるところは文學美術衛生の事に專ら心を注ぎたるものゝ如し斯して二八の芳春は已に過にき今や人の母として社會に貴重せらるゝ所以のものは宗敎上に社交上に經濟上に學問上に許多の經驗を重ね來りて流麗浮華の裝飾を脫して單に正確純潔なる言辭を用ひて實地應用の術を講じ實理を談じて後進者を奬勵せんとするにあるあり故に婦人矯風會の助言者となり禁酒會の賛成者となり或ひは一男一婦の說を演べ廢娼論の先鋒とあり筆力の及ぶ丈は婦人社會へ盡しけりされば他に優美艶麗の雜誌あるにもかゝわらず其名は遠く江湖に高く聞えて繡幃夜更て玉の枕に夢孤寂淒き寢の床の伴侶として婦人に貞操苦節の道を敎え榮に處し否を窮む紅裙社會に一日も缺く可からざるものとまでもてはやされたり女學雜誌の頃日のありさまは恰も霞たつ春の雲雀が旭日の光線を吸ひて雲井にあがり雪のしらべを芝生の野べにまきちらすが如し社會に上等の奴隷と言れ翫弄物と擯斥せられたる見る影さへあき女性の上に天なる神の光輝をうけて慈愛と至誠の言辭を放ちてこれを奬勵鼓舞して其品位を高め其德行を振起せしめて快活なる新天地の間に逍遙自適せしむるに至りたれば紅裙社會のゲブリールと言ざるを得ざるあり今や多事なる明治二十三年を迎て其の盡すべき務めは極めて多し幸に既往の經歷を鑒て將來の方向を直くし讀賣新聞が嘗て賞賛せし箝奴社會の汚濁を掃蕩せん爲め生れ來りたる聖使の天職を盡し頭未だ初霜をおかずとも社會に貴重景慕せられん事を新玉の年たつけふの祝詞としてこゝに望むもの也。

○新玉の年のことほぎ

門松、注連繩、屠蘇、万歲の古事　　高橋侗

東天に金色の雲間を昇る太陽に、早くも明治二十三年の春を迎へり、大晦日の繁忙に叱れながら夜更しをしたる小兒も、紙鳶のウナリに眼を覺し獨樂の廻が如くに飛起たり、羽子板の音に手早く粧飾をすましたる小女は、羽子につられて繰人形の風姿を學べり、馬車腕車をキシラせる貴權紳士の急し氣

に見ゆるは交際の廣が爲か、才識に具似て扇子拍子をうち、心のどかに足踏跚たる者は屠蘇を過せし機嫌の餘りか、敝温袍を衣て狐狢を衣たる者と立て不恥者は子路を口實となす無職不能の懶惰生か綾羅錦繡をひるがへして松飾のかげに隱るゝは醉狂人を避くる御年頭廻りの令嬢ならんか、西も東も餘裕に賑はへるは畏も正明なる昭代の御恩澤とこそ思はるれ、數ならぬ余も此に新年を迎へ、妻女が心つくしの屠蘇にうかされ、晴を賑づる雀ならねど千代万歳と祝ぎまつる。」

さて當年の書初として門松、屠蘇、万歳等の事實を記さんとす、去れども是等の儀式の事既に諸先生の説あまたあれば、今更物々しげに筆を採んも、わたら初刊の貴紙をうづむるのみにて益なき業とは云へ、御年ゆかぬ令嬢中にはまだ知ろし召ぬ方もありぬべしと、故人の遺説をまた再び不相變抄錄して、いゝゝゝゝいくひさしく文壇に、愧のかきぞめ染筆の、跡を止むる事とはなしぬ。

門松　本邦新年の儀式として門に松を樹注連繩を結、以て新年の祝意を表する事は古來よりの習慣あり、明治革新以來洋洲の風にならひて綠門を作り、門松にかふるの家ありしが、近年大いに減じたるものゝ如し、蓋門松の起源は諸說紛々として未だ確にする能はざれども、八百五十年前この儀式ありしと思はる、本朝無題詩卷之五雜部に云、

長齋之間以レ詩代レ書呈二江才子一　惟宗孝言

占期百日潔齋處。正月春中閉二四關一。持レ案法華聽二聖讃一。鎖レ門賢木換二貞松一。（近來世俗皆以レ松插レ門、而余以二賢木一換レ之故云）西方晩觀素無レ怠。南无曉聲介レ不レ慵。戴土石山君所レ樂。我猶致レ信是金峯。

とあり、惟宗孝言は紀元千七百年代の人なり、大日本史文學列傳に云、長久四年與二惟宗孝言源時綱等一試二於校書殿一とあるを見て其年代を知るべし、然れば當時新年の式として門松を立たること疑ふべからず、後四十六年を經て堀河天皇の御代に至りては、和歌にその證多し、堀河百首の藤原顯季の歌に

門松をいとなみ立るそのほどに、春あけかたの夜やなりぬらん、

とあり、また俊惠法師の林葉集に、正月三日人のもとにまかりたりしに、中門に松をたてゝいはれたりしかば

春にあへるこの門松をわけ來つゝ、われも千世へんうちに入ぬる、

と見ゆ、俊惠法師は源俊賴の子なり、俊賴は堀河鳥羽崇德の三朝に仕へて才識人に勝れ、和歌を以て其名高し、去ば此

歌は紀元千八百年代前後ある新年のありさまを詠たるものなり、下つて鎌倉氏のとき建久六年に源頼朝と慈鎮和尚贈答の歌に門松のことあり、拾玉集の五に見えたり、

我おもふ君がすみかのおもかげは、松たつ門の春のけしきに

と詠り、後また紀元千九百九十四年代即ち南北朝のころほひ記されたる徒然草(作者兼好法師)に云

かくて明行空のけしき、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへてめづらしきこゝちぞする、大路のさま、松たてわたして、はなやかにうれしげあるこそ、またあはれなれと云々

とあれば、當時は現今の如く每戸門松を立たること明かなるべし、さて竹をも立添しかといふに、古今要覽時令部に載たる土佐光長所レ畫年中行事圖朝覲行幸門松の圖を見るに、五六尺とも思はるゝ松を一行に樹並べ、檐下には注連縄を結まはし、それに杠葉をはさみ下たり、別に竹樣の物を見ず、また和歌にも門松とのみいふて竹のことを詠ざれば、竹を立添るは近代の事と思ひしに紀元二千五百年代に此事見えたり、世諺問答一條禪閤の答に、

いつごろとはたしかに申がたし、門の松たつる事はむかしよりありきたれるなるべし、しづが家居は大かた方戸なるによつて、民戸と申侍れど、むかしは一町のうちを五丈づゝにわりて門を立しかば、八門ありしなり、その中に賤が家ゐをつくり侍れば門なかるべきにあらず、その門の前に松、竹、を立侍り、松は千とせをちぎり、竹はよろづ代を限る草木なれば、としのはじめのいはひ事にたて侍るべし、齒朶、ゆづり葉は、深山にありて露霜にもしぼれぬ物なれば、しめ縄にかざりて、同じくひき侍るにや、

とあるを以て、既に當時より後世と異らざりしを知るべし、もと門松は正月十四日夕まで門に立るを例とす、然るに東京にては七日の朝之れを取除けり、こは舊幕府の制度より出づ、嬉遊笑覽に云

寛文二年寅正月六日町觸に、松かざり明七日朝取可申事、其後もなほやまざりしと見えて、寛文十年戌正月又おなじ法度の觸ありて、來年よりは相觸申間敷候間每年左樣相心得可申候、と見えたり(中畧)武家には久しく立おくもあれど、大かたは門飾を取て其跡に松の木梢を折て挿おく、との故なり、

とあれば、この慣例の東都に起りしは紀元二千三百二十二年來以降のことゝ思はる、今古今要覽にある英一蝶が畫かれし松飾の圖を見るに、近來の門松の立様と少しも異なる事なし、因て思ふに現今の松飾は元祿（紀元二千三百四十八年）時代より今日に及びしものか、他はなほ考證を得て再び記載することあるべし

因云、古歌に、しづが門松といへば皇居の諸門を始め貴族の家には此式なかりしといふを、鹽尻に云、按ずるに藏玉集に、年具の歌を載て「大内やももしき山の初代草、いくせ人にふれて立らん」初代草は正月二日大内に植る松なり、門松の事なり、とあり「且つ前文に引たる土佐光長の圖は朝家の樣を摸寫たるものなれば鹽尻の說しかるべく思はる

また徳川氏のとき江戸城の松飾に葉なき竹を用ゆ、これは三河にて、竹はた竹にて直に被成し例也、と嘉良喜隨筆に見ゆ、其他四季物語、温故日錄、歲時故實、年事略儀、羽尾記等の諸說あれども略せり、

注連繩　門口或ひは家の周圍に注連繩を引わたして俗に是を注連繩といふ、其起りもつとも古しとなす、古事記神代卷に云

天照大御神逾思奇而、稍自戸出而臨坐之時其所隱立之天手力男神取其御手引出、即布刀玉命以尻久米繩控度其御後方白言從此以内不得還入云々、

とあり、これ注連繩を引渡す始めにて古語拾遺に云

爰令天手力雄神引啓其扉遷坐新殿、則天兒屋命太玉命以日御綱廻懸其殿云々、

とあるを見て其起源を知るべし遂に下つて紀元千五百九十一年代に及びては既に民間に於ても正月注連繩を引渡せしと見えて土佐日記元日の條（此書は紀貫之が承平五年任はてゝ京へ歸る時の記行なり）に云、

小家の門のしりくめ繩云々

とあるにより、九百五十九年前に其例ありしこと明かなるべし、古事記傳に云

尻久米繩は今いふ志米繩なり、藁の尻を斷去すて、さながら許米置たる繩なり、書記に端出之繩と作て此云斯梨倶梅儺波とあるにて知るべし、端出とは斷ざる藁の尻の出たる由にて、即ち後世の志米繩の狀なり、又師の說には、尻は後方の意、久米は限日にて、今天照大御神の御後方に引わたしたる限日の繩なる意なりとあるも、さることとなり、

といへり、後世注連繩の作様に種々の名稱あれども、そは推

て知るべし。

屠蘇酒　年の始に屠蘇酒を飲ことは紀元千四百七十年代即ち嵯峨天皇弘仁中に始られしよし公事根元に見ゆ、然ば屠蘇酒の起りはいと古しといへども、その式の物に見えたるは之れより九十年の後延喜の朝を以て始めとす、延喜式に云、

十二月晦日卯一刻宮内省并寮共候㆓延政門之外㆒、闈司奏訖寮官人率㆓藥生等㆒昇㆓御藥案㆒相共入置㆓庭中版南㆒共以㆑次退出、省奏訖更入昇㆑案退却付㆓御藥㆒、但官人、將㆓藥生㆒同日午時封漬㆓御井㆒令㆓主水司守㆒、元日寅一刻官人率㆓藥生㆒就㆑井出㆑藥、即省補一人並寮官人等持㆑藥共入、進殿、即用㆓銀銚子㆒煖㆓屠蘇㆒(造酒供㆑酒主殿設㆓火爐㆒)侍藥執㆓御盞㆒率㆓女孺㆒昇㆑殿令㆓藥司童女先嘗㆒然後供㆑御、次白散度嶂散三朝而畢云々

とあり、こは主上に奉つる儀式にして元より一般の事にはあらざれども、下また上に習ひて多少其大意を學びしなるべし、

倭訓栞に云、

屠蘇は元日に献る酒の名、内々行事に、二袋紅の切にて五寸ほどに鱗形にして柳の枝に糸にてつくる、白散は刻ながら御銚子に入と云、(中畧)今二宮の白散は米粉を用るとも云也、是古椒酒の遺意也(中畧)また幼者は年を得ば先だちて飲、老人は年を失へば後て飲よし時鏡新書に見云々、

とあれば、屠蘇酒を飲には幼者より始るものと思はる、さて何故に年の始に之れを用るかといふに、一人是をのみぬれば一家に病なし、一家に是を飲ぬれば一里に病なし、と公事根元に出たれば、年中無病ならん事を欲して、毎年の例式となれるが如し、今なほ此習慣を守る家ありといふ。

万歳　年の始に人の家に來て祝詞をうたふ者を万歳といふ、貴賤とも必ずこれを招きて新年の儀式となす、その報酬には米錢を與へ、且つ酒、靑魚の子、雜煮などを馳走して歸すを例とせり、此者の打扮を貞丈雜記の標注に云、

昔の万歳は折ゑぼしに素襖を着たりしとぞ、近年は風折ゑぼしに大紋の直垂を着るなり、何樣のことも昔にかはりたる事あり、

と云はれ、また一話一言禁裡萬歳之御式の條に云

裝束は三位烏帽子(此烏帽子古へ上より給りし由申傳候)大紋着(但下は半袴の如く裾短也○大紋萌黄色の薄樣なる者の由、紋所丸の内に笹輪頭を附る)服は紅の兩面の小袖(尤無地)下に白無垢を着小刀を帯す、舞時は兩人共に脫劔也、

歳若は万歳烏帽子素襖着（但下は半袴の如く裾短也、〇素襖花色、肩に模樣あり紋所無レ之）紙熨斗目（紋は丸の内に笹、輪頭を附則ち小泉氏の紋所なりと云）を着刀脇差を帶す、

とあり、然らば万歳歳若（才藏をいふ）の裝束は我國貴族的の禮服を着したると明かなるべし、蓋万歳はもと踏歌の變じたるものか、倭訓栞、歳時記等にも此事を引て其始とするが如し、若し踏歌を以てこれより出たりとなさば、遥に上代に起りたるものにて紀元千三百五十六年代、即ち持統天皇七年を以て始とすべし洋々社談（那珂通高氏記）二十七號に云、

萬歳果して踏歌ならば其の始は慶雲三年より十年の前に在り、日本紀の持統天皇七年正月十五日の條に是日漢人等奏二踏歌一と見ゆ、釋に私記を擧て、今俗曰二阿良禮走一、師說此歌曲之終、必重二稱萬年阿良禮一、今改曰二萬歳樂一、是古語之遺也と云へり、

とあるを見れば、萬歳の名稱は既に此時に起るか、男踏歌は永觀元年に止たれども萬歳樂の一事は世に行はれて、堀河天皇の御代に、藤原忠實公が從者を懲すに万歳樂を以てすることを閑田耕筆に古今著聞集を引きて云、

知足院殿（忠實）大とのとておはしけるが、侍を御かんだう有けるには、千秋万歳をもちてはやさせて、其侍をまはせられける、さる御かんだうやあるべき、

とあり、去れば當時全く万歳樂のありしこと疑ふべからず、下つて足利氏の時に及びては正月之れを營中に招きて、その所作を演ぜしむるを例とせり、貞丈雜記に年中行事恒例記を引きて云、

正月七日部云、千秋万歳參る於二松御庭一被レ爲レ舞レ之御太刀侍被レ下レ之同朋遣レ之御供衆少々伺候云々、古は千秋萬歳といひけるを後世は畧して万歳とばかりいふなり、萬歳の唄物の詞に千秋萬歳といふとありしゆゑかく名けたりとぞ、

と云へり、紀元二千百七年代に至りては民間に於ても專ら万歳を招きしと見えて、それを以て業とした者の増加せし有樣を臥雲日件錄文安四年正月二日の條に載て云、

一種乞食革歳首致二人家一歌二祝言一世號二之千秋万歳一前后相逐來各與二百錢一云々、

とあれば、既に此時代より後世德川氏のときに比しく、貧富の差別なく正月に万歳を招きて、新年の祝詞を演ぜしめたることゝ思はる、さて禁裡へ參ゐる万歳は陰陽家小泉豐後之れを勤む、豐後は羯鼓を持てこれをうち、歳若は何も持ずして

地を鎭よし、一話一言に見ゆ、また大和万歳も數代の祖宮本重太夫以來御所へ參りて祝詞をまをし、萬歳の御用を勤むといふ、三河万歳は万歳作太夫毎年東都に下り德川家に參るよし擁尻にいへり、明治革新の後も習慣の久しきになづみ、一月必ず万歳を招きし家ありしが去る九年万歳禁止の令出てより一時其跡を斷しかど、後また稀にそれかと見受る者あれども以前の万歳とはいたく其風俗を變て、寧に類似の者と云ふのみ、

以上の記事は總て要件の一二を抄出せしに止まりて、その大略を述たるものなり、その他雜煮鏡餅、寶船の記事あれども餘り冗長に渉るを以て、そは追て云ふとあるべし。

雜録

○年頭家族の樂　しのぶ

忙がわしき時は仕事を爲るにはわらで仕事に役せらるゝ心地す、朝たより夕べに至る迄て、てがみを認めて四方に音信するに幾十通に及び、日に〱文章を綴ると十數葉の上に出て、其間だ東西に奔走り上へ下の人に面談して世の中の樣を探る又た出入金錢の事を考へて事務の盛衰を苦慮するなど、凡そ日々かゝる事に煩わしきときは交際の樂しきを覺えず、左れど一旦務めを畢りて志あへるものと打くつろぎて物語らひ、何にと云ふ所存もなくて只そこはかとなく雜話するときは、交わりの樂しきと言ふ計りなし、特に我家に於ての愉快に至りては一層に左なり、年初一週の間だ我家族と團欒するの和樂は即はち此の二つの樂しみを合はせたるものなり、新年は人世の春なり、老ひたるも若くなり、若きものも小供となり、天下無邪氣、四面歡呼、見るものとして樂しからざるはなし、此際一家内高く笑ふ聲には、惡魔もほゝえむならん、鬼も角を隱すならん、何ものか愛嬌を呈せぬとやある。

○年始の詞　醫學士　三島通良

また〱ちかへりける、あらたまの年のはしめ、なに事にまれすへき事の、まうけせはや、一日もいたつらに、すこすとかはと、思ひけるうち、いつしか、一日二日はすき行かん。はしめてこゝろ付きたることく、あはてふためくも、はやおそかりけり。なにとて今年は、かくも月日の、いそきすきゆくならむなと、訝るうちにも、またときはすき行くめり。いそきふ

みとうで、讀みてん、ふでとりて書きてん、定れるいのち數ふる月日なめれは、一日もはやく、ことはしめおかされは、思はさるほとに、三年四年たちゆきて、やさりし事とも悔いなけき、かのをりてのこと、始めおきたらましかはと、思ふもくひなからまし。いてや年はさらなり、月も日も、一時も束の間も、むなしくすてさめやと、こゝろして、百年いきたらんも、一年は、そかものひとつにそ、あるらんものを。

○一年の老人　もみぢ

一年の暮にあつて、篤と考へて見ますと、新年元日にわれと約束したとは、中々その十分一も出來なかつたであり升、初めは斯樣云ふ理窟だから是非斯う成らねば成らぬなどと思つて殆んど一點も疑がわなかつたとが、日が立ち月を經るに隨つて扨て其事を實際に致して見ますに、中々議論と實際とは余程違ひます、固より議論の理窟が間違つて居つたと云ふのではありませんが、議論では悟れなかつた理窟が實際には多くあるので、此の理窟は則はち實際を經たる上でなくては決して悟るとが出來ませんでした、除夜燈しび暗ときつら〱と一と年の經歷を考へますれば、成程此一年にて余程の經驗を得た、此の春はまだ子供であつた、兎角物事を致して見なければ分らぬと感ずるとが多くあります。

デ、一年の間だすら既に斯樣です、左らば五年十年二十年と云ふ長の經驗を積んだ老人のお方々は、雨にも遭ひ風にも當り幾多の困苦艱難を經て實際の智識を集められたる方々であるから、其言はるゝとは實に價値のあるとで決して粗忽に聞くとは出來ません、一年の經驗を得た吾が其年の春の吾よりも優つて居るとせば、更に數十年の經驗を得られたる老人は一層優つて居られましやう。

議論でも、文章でも、事業でも皆同じとで年の少い内は万事たゞ理窟のみで行わるゝものと思ひますが、扨て色々と經驗をして見ると決して左樣では無い、何にも人情と云ふものが附きまとつて、人情の上に勝利を得ないとは到底行われないものだと云ふとが分ります、議論でも理窟のみでは無効です深く人情に適わなければ成りませぬ、文章でも文が立派だからと云つて善いのでは無い何よりも先づ人情に適し人情を動かすの力が無くては眞の名文とは致されません、事業も亦其通りでどれ程世が危急存亡だと云つてもこれは大切なとだと云つても其理窟丈では事は出來ません又たとひどれ程に善いとて人の感服贊成するとでも好く〱人情に隨つて致しませ

ぬと決して出來ぬものです。斯様に申しますと、お前も亦た年を取つて老くさいことを言ふ夫は老人のくせだと仰られましやうが、左様に仰しやるのがまだお若いので、其方々も若し段々と世の中のとが分ると、前に申したる道理が明白に分ります、女權論にせよ、何にせよ、理窟のみで行わるゝものでは決して無いのであり升。年の効と云ふは、年の經驗を積むの効です、何年たつても矢張り子供らしくては、世に成人する甲斐が無いです、若し去年一年の經驗で大ひに悟つたとがありますれば、今年は即はち其悟つたるやうに覺悟を爲さい、之が智者の心術です。

○女生徒に薙刀を敎ゆる事　山下石翁

星野さんが御投書になつた、女生徒に薙刀を敎ゆるのお考は至極同意です、元來女生徒に躰操の必要なとは今更申す迄もありませんが、扨て其の躰操には何如なる方が宜しひかと云ふとに付ては、世上に色々の說もあり亦た自分も様々に試みて見ました。兵式躰操は武張るのみで女には適しません、女生に當はめた新式の躰操も元來器械的にするとですから、最上の手段とも思へません。今日迄に伺がつた說では、どうしても此の薙刀のお考が第一でしやう。夫も柳生流のやうに力を凝めるのは女に宜しくありません、夫には此春流が一番宜しひので、云はゞ四十餘の踊りの手を扇を以て習ふやうなもので、第一風姿も美くしく、至極女らしひのであります、シテ其「手」を習つた上は、薙刀を揮つて試合をさせるので、無論器械的にも流れず、去りとて疎暴にも渡らず、優美なる中に凛々たる勇ましさを發ふのですから恐らく女生の躰操には之ほど善いものがあるまいと信じます

○夫で之はたゞの議論でなく、何處かの女學校有志者を以て試みて見やうと存じますから追ては其結果を確かめた上で更に志しある方々にお知らせ申しませう。

○イカツイ　標正町　あさ女

良人の友人某が妻女を娶りたいとて頻に擇むで居りますが所謂長し短しで思ふやうなのが無いとのこと故妾も心掛ました處ろ彼娘なら氣に入るに違ひないと思ふ娘がありましたから良人に話しましたら良人も之を可としまして早速友人に問ひました處ろ友人の申しますには

「なるほど彼娘は美貌と云ひ學識と云ひ申分はありませんが惜ひことにはどうもイカツイから

ト對へたさうです。ア、世間のお孃さん方このイカツイと云

ふ魔物は白璧の微(否)一大瑕瑾となりまするからお心附あそばしませ古人梅室の句にも稲妻や女の端居にくらしきト吟じて御座います。

○羽子板　　あさ女

父上のお話に昔し御趣意の時(老中水野越前之守)にやかましかッた俳優似顔の羽子板も近年では追々善盡し美盡くして來て實に無益な事だト申されましたが御尤もです。此間明神様の市で見掛ました「改良板」と云ふ羽子板は一寸趣がかわッて居ましたが矢張漆で俳優の紋が書てありました是が花鳥か山水なら一入でせう。

○縫針の習ひ方　　井上二郎

兎角此れ迄の教へ方は、何事に限らず不規則でありまず。先づ西洋の書物を見ると、卷末に細かな目録が十數枚も附いて居て、何か一ケ條を調べたいと思へば直に枚數が分やうに成つて居りますが、日本の此迄の書物は初めから終迄悉く讀んで見なければ何處に何如あるとが書いてあるか少しも知れないと云ふやうなもので、万事皆な如此き相違があります、夫故音樂を教へるにも、西洋のには譜がありますからドンナ上手な人でも暗奏するのではなく皆一々譜を見て演じますが、日本のは悉とく暗奏で一から十迄で覺えて居らねば成らぬのです、斯る次第ゆへ物を覺えるに骨が折れて一歩新發明すると云ふ方に抜き出でる余力がありません、我國に於て万づの藝が進歩しない元因の一はたしかに之れです。

縫針のことに付ましても矢張り同樣で、今の樣な教へ方を仕て居ては、縫針丈けに五六年かゝつても左程上手にはなれぬと思ひます、書物を讀むのにも字引と云ふものがあつて、或る段から上は獨りで字引を見て修業すると云ふ工夫が附くのですが、縫針などに至つても亦其樣にありたいです、先づ針を運ぶとを習ふには、白木綿に赤い糸か何かで縦横十文字に縫つて見て指をならすが宜しい夫で澤山です、其后は裁ち方と仕立方とを書物によつて見、亦着手の長幼大小によりて丈行などを割出す算術丈けを知つて居れば一人で出來るです、其樣な仕方で教へなければ實に徒勞です、特に忙がしひ女學校の教科などに裁縫を教へるのには、是非此樣な仕組でなければ、第一時間に大損をします、第二には女生徒が好ません、第三には學問ある女生自身の役には立ません。

○一月の養生　　美芳野舍田面

月の中にも殊に芽出度き一月、その月のしかも始刊の女學雑

誌に、病氣の話など持ち出さん事は、不吉ならずやとの御責はさる事ながら、古人言へる事あり、一日のことは朝にあり、一年の事は春にあり、一生の事は少にありと、されば人として此芽出度間に、一年の事始せんこそ、實に芽出度き事とわなみは思ふ、その芽出度と云ふ中にも、ことに芽出度は人の健康なり、いかほど芽出度日、いかほど芽出度時なりとも、身に病あらん限りは、なに芽出度かる可き、これ田而がことに一言を添て、此の芽出度月を芽出度暮し給はん爲、一月の養生となん云ふ文かくになん、豈に芽出度文ならずや。

吾邦の風習にて、一月には、橘插ざす宮人を始として、薪樵る山賤の家に到る迄、餅をつきて祝ふ、其内には、座りよき鏡餅、熨斗餅を始として、木葉散せる如きかき餅、岩かきたる如き堅餅、田舍老女の化粧せし如き粟餅より、甘きは砂糖餅に到る迄、或は燒き、又は煮、阿部川餅汁粉餅の下戸の類をおとし、若燒餅雜煮餅の上戸に喉を鳴さしむる、戸毎之を食はざる人なし、此餅元より澱粉質のもの、適宜に用ふれば、害なきのみならず、滋養となるや明けし、されど、朝には十二ヶ月の汁粉を不足氣に食ひ、夕に阿部川の十切位を茶菓になす如きは、忽ち胃腑を傷ひ、溜飲等を發す知る可し、餅の分量皆に謹まざる可んや。

次に家毎に用意するは、御重詰なり、此は、點心を始として、鳥魚の珍味より、己居らずはの如く、切歯する韶陽魚、骨折て噛締たらましかはと金平の午房、わなみも共に召し給へやとほゝ笑人參、海原の色はかくこそと青みたる海苔など、諸々の馳走なれども韶陽魚の照焼、金平午房、切鯣等のもの、元より消化宜からず、祝の物これ欠かんは宜からねども、祝の物となれば、反つて少量食たらんこそ宜けれ。

昔より祝事には、欠く可らざる物として、我國も異國もおて囃す酒、酒なくばの句を以ては、我國の名花を以て誇る櫻花さえ名譽を毀損せられたる酒は、ことに屠蘇酒となつて下戸上戸の差別なく之を味ひ、一重過したらんには、辛き方ぞほしきなど稱へて、清酒をねだる上戸あり、凡て酒は、醗酵して出來たるものは、蒸溜して造りたるものより害少しとは、歐洲生理衛生學大家の説なり、我國に酒呑謹忘の狂者少なきは、其飲料の酒、多く醗酵性に依る、其一因ならんとは、わなみの師、榊教授の説なり、されど何れの點より論ずるも、酒の利は、藥用を除きては、其害を償ふ事能はずとは、此亦生理衛生兩學者の説なり、故にわなみは祝事の酒たり共之を除けと迄、論ずる頑固者には非ざれ共、たゞ酒の利は、其害

を償ふに、大不足なりと云ふ事を以てこゝに之を結ぶ。

春の夕の手枕に、夢おどろかす軒の雨とは古の事、今は宵長き一月の夕、若き老たる、男女の差別なく、歌留多の遊びに夜の更行を知らず、十一時、そはまだ早し、今一二回は一時ー、それなればハヤ鶏鳴に近し、イッソ朝早迄夜明しせんと、一の室に多人數集り合ひて、此所に多くのランプ蠟燭を燃し、彼所に暖爐火鉢をおき、炭酸ガスの室内に充滿る如きは物屑ともせず、時に茶を喫し、甘き菓子、堅き煎餅、或は蜜柑、九年母の類、又は汁粉、雜煮、着燒餅、あれこれの差別なく腹に充たせ、アナおもしろし、實に愉快なりしと、欠伸一つ宛せし頃は金烏既に中天に舞ひ、自鳴鐘は九時を撃つ、其日は嗜眠、倦怠して、肺の弱きは氣管支加答兒を起し、又は咽喉の加答兒、或は眼を患し、特に胃腸を害ひ、仕事に付く事の出來ざるは勿論、翌日よりは遊びさへ身體思ふまゝならずして快よからざるは何人も解し得可き事にこそ。此を以て折角芽出度一月を、芽出度祝はんとして、身反つて病をうけ、芽出度月を芽出度からぬ藥の中にくらす者、そも之をも芽出度とや云はん。かゝる小言めきたることなれば、例之利益多かるも、皆樣の欠伸の料にせられんも遺憾ければ、こゝに筆をとゞめて余は他日にゆづる。

○ウイリアム、ウォルヅウォルス傳（一）

ウイリアム、ウォルヅウォルスは一千七百七十年四月七日英國カンベルランド縣カッケルマウス郡に生る父は法律家にして才識あり雄辨の聞えありし人なりロンスデール伯の法律顧問を務めたり母はアン、クックソンと云ひ殊に道念高く敬神の念深かりし方なりしと傳ふウォルヅウォルス八歳の時身まかられ然共母上の子に對する愛ありて然も正しき所謂未だ東西をも辨ぜざる幼心に染み渡り後年此大詩人一生の感情を支配せりウォルヅウォルスに五人の兄弟あり長男は代言人となり夭死し三男は船長となり若男クリストファアは宗教家となり名僧傳の著者博士ウォルヅウォルスとして其名を留めたり唯一人の妹ドロシイは則ち兄ウォルヅウォルスの慰諭者扶助者共働者として一生を送りし方にて感情強く文才詩才に富みし賢婦人なり此五人の小兒中殊に母上が後來を心配せられしは詩人ウォルヅウォルスにて或るとき此兒こそ後には善にせよ惡にせよ必ず何事か仕出すならんと宣ひしとゝあり母上の[illegible]たるウォルヅウォルスは幼きより頑固激烈の性質にて後年自ら物語られし所に依るに或る時何か氣に障るとあり祖父の寝室に入り兼て其所にありし鐵炉を取り自ら害せんと企てたり然れども其場に至り氣落ちて思ひ止まりしともありたりと。

ウォルヅウォルス初めてペンリスの小學に遊ぶ抜に三十年の後此詩人の伉儷となるべき一小女メレー、ホッチンソンと相知る次でコッケルマウスに在る一二年一千七百七十八年則九歳の時ランカスャイア中學に移る居ると六年氏の詩藻の初めて文字に發したるは此時なり氏は幼より天然の景色を愛し閑あれば則ち一枝の筇一幹の杖飄然として家を出で山間幽谷を逍遙す氏の初什は這般の經歷を韻に上せしものなり。

一千七百八十三年父逝く餘財とては多くあらず是に於て四男一女二人の伯父に養はる伯父能く之を視る父の如し一千七百八十七年十八歳の時ケンブリッヂなるセントジョン大學に遊ぶ當時英國大學の教育法氏の氣風に投ぜず殊にケンブリッヂに行はるゝ羅甸希臘の古典研究は氏の流溢せる詩想の潮流を堰き止めたると見え大學にある四年唯「ゼ、イーブニング、ウォーク」と題せる一篇の作ありしのみ是とても大學内の景況に關する想像は一もなし文藝の叢林たるケンブリッヂに在りて其感化を受けぬとは異常の如しと雖ども是れ盖し其故なきに非ず氏が「ネーチューア」を愛するの情は年と共に増し瀑布巖石山嶽深林は氏の最愛の親友なり一たび之に接すれば自ら忘るゝの趣あり故に數百年の古觀なる大學の講堂老博士の陳腐なる講義などは却て氏の自由に奔馳せんとする想像を萎縮せしめしなり左れば此四年間も休暇を得れば直ちに去って湖畔嶽麓に其精神を養ひしと云ふ。

一千七百九十年の秋親友ジョーンスと共に各二十磅を懷にし僅少の荷物は手巾に包み一本の杖を手にして佛蘭西瑞西を經て伊太利に旅行す此時や彼の空前絕後の大慘劇を演したるバスチル獄破壞を去る僅に一年見事に王權を打ち倒したれども善後のこと未だ成らざるに佛人は已に自由の黃金界を望んで歡呼する時なりし想像に窮み至全の樂境を理想する後來の詩人ウォルヅウォルスは此形況を見て早く已に壓制の天地去り自由のパラダイス將に來らんとする空想を浮べたり是れ獨りウォルヅウォルスのみならず當代の詩人にして此大革命の氣風に感染し自由のため熱心に謳歌せざりし者は無りしバルン、バイロン、コルリッヂ、ソウセイ、カメルの如き皆然りしなり。一千七百九十一年一月「バッチエロル、オフ、アーツ」の學位を得てケンブリッヂを去るロンドンに留る數月舊友ジョーンスをウェールスに訪ひ共にウェールスの名山大川を跋涉して文氣を養ふ、此際宗教家たらんことを勸むるものあり當時英國教會階制の氣風平民主義を主張する氏の心には適せざりしか或は他に理由ありてか氏は之を辭せり幾ばくならず再び去つて佛蘭西に趣く。此時に當て佛國は彼の有名なる三民會議バスチル獄破壞より次で壓制との苦戰將に終り三色の旗は自由の南風に飜飜たりと雖ども國家の騷動黨派の激戰未だ止まざるの時なりしなりウォルヅウォルスは平民主義の辨護者なり殊に壯年客氣盛なるの時なり最早坐して見るに堪えず佛人のため同情の感禁ぜず則ち此年の秋袖を投じて起ちドーバーの海峽を渡たり忽ち大活劇の現場にぞ立ち顯はれけるかくて巴里に留る數日國民議會の大混雜を目擊しジャコビン倶樂部の激論をも傍聽し巴里よりオルレアン府に赴く茲に革命黨の一首領ボーピュイ將軍と相知る將軍は愛國忠誠の君子にして又た剛勇果決の軍人なりウォルヅウォルス將軍と交はる深し或るときは共に手を攜へてロアルの河畔チレルアンの林中を彷徨散策し彼等の預想せし自由の黃金世界のことを語りて相慰めしこともありしならん後年の戰將軍不幸にして遂に陣沒せり明くれは一千七百九十二年の春オルレアン府を去りブロア府に至り夏を過し秋風の起ち初めし頃再び巴里に皈る此時景況を尋ぬるに我れ則はち佛國なりと云ひしルイ十四世の王權も最早全く其迹を止めず昨日まで万乘の尊位に坐して天下に號令せしルイ十六世も妻子と相分れて一所の牢にさえ入るを得ず世は全く共和の政となり至る所共和万歲の歡聲は干戈鐘鼓の響と相和しマルセイルの調を唱ふて市街を横行する人民は其數を知らず然れども一朶の密雲は已に此歡呼祝賀の聲の絕たぬ中に凝結せる一滴を注ぎ出せり國會は黨派激戰の場と變じ政治家は自由平和公平道理を肩に掛けて殘虐陰謀を逞くし今日政權を握る者も明日は早や斷頭臺上に立つ禍福は倏忽に其所を變へ志を得る者は反對黨を悉く殺さんとすウォルヅウォルスは自ら監獄を巡り無辜の囚人のために淚を垂れ埋葬場に至りては深夜屍の山の如く積み上げたるを見痛嘆に堪えず嗚呼かくも自由と云へる聖き名の下に云ふ可らざる殘虐の行はるゝことか何ぞ一人の奮起して此道理的革命の世界を回復し自由の行はるゝ眞正の黃金界を持ち來す者なきぞと發聞に堪えずかく氏は革命家の暴動には反對せしも氏の心底に炎へ立つ自由の活火は尚ほ氏の心を温めて此革命の天地に留り其始終を共にせしめんとせり哀れ此將來道德界文學界の一大星となるべき大詩伯ウォルヅウォルスも革命亂後無名の鬼となりて消え失せんとせり幸なる哉本國の事情は彼をして英國に皈るの決心を起さしめたり氏留ると數月ならば必ず彼の歷史に有名なる九月の大虐殺の一犧牲となり了りしならん氏は後年の作中に陰濕なる天祐に導れて此危機を免れたるを謝せり。

○クリスマス對話、姉と妹

秋　し　の

明治女學校のクリスマスにて安藤野田二少女が催したる對話は非常の喝采を得ましたから、お勸めに任せ其台帳を揭げます。

姉さん何處へ行くの？

オヤ跡を付て來たれ、姉さんは學校へ行くの。

デモ學校は御休みではないの？

待て居たクリスマスが來たから。

クリスマスと云ふ人が學校へ來たの？

イーエ、クリスマスと云ふのは人の名ではなく日の事なの。

ソー火の事をクリスマスと云ふのランプのクリスマスや火鉢の中にもクリスマスがあるの？

その火ではないの、キリストとおつしやる方が御むまれ遊した今日がその方の御誕生日ナノ……子供ちやんが生れた日と同じ事よ。

その方は何處に御むまれ遊ばしたの？

ユダヤのベツレヘムと云ふ處でキリストが御生れ遊ばしたの。

覺えられないわ。

ユダヤのベツレヘム……ベツレヘムと云へるか云て御らんなさい。

ベツレヘム。

ソーそのベツレヘムにキリストが御生れなすつたの。
ベツレヘムがキリストに生れたの？
イーエ、キリストがベツレヘムに生れたの。
さうそれから？
その時博士たちが東の方より星を見てユダヤへ來てキリストを尋れたの。
星が出てユダヤへキリストが東の方より來て博士を尋たの？
イーエ、博士がキリストを尋れに來たの。
そうそれから？
キリストはマリヤと云ふおつかさんに抱かれてまた馬槽のなかにいらしつたの。
馬槽と云ふのは何に？
馬槽は馬にものを喰べさせる桶のようなもの？
キリストはさぞ寒むかたでしようれ、そしてなぜ玉ちやんや姉さんのように蒲團の上へ御れなさらないの？
キリストは貧しひうちへ御むまれ遊ばしたからそのような苦しひ目に御あひなすつたノデス……それはそうと姉さんはもういかなければなりません。
姉さんアレ待て頂戴よ私はまだクリスマスが解からないから御話しゝて頂戴よ、よう姉さん。

此時袂を捕へる。

デモ姉さんは行かなければならないから御はなしよ。
私に御話しが出來るものですか姉さん話して頂戴よ。
困る子ー御話しではない袂をはなして下さいと云ふのよ。
アハ袂をはなしますから姉さん御話しゝて下さいよ。
仕方がない事子ー、そんならまだ少し早いから御話しをしましよう、イエスが御むまれ遊した時にひつじかひがイエスを尋ねて來たの。
御生れ遊ばしたのはイエスなの、キリストは御むまれなさらないノ？
イーエ、イエスが御名でキリストと云ふのは救主と云ふ事。
ソー、ひつじかひも星を見てユダヤへ來たの？
イーエ、天の使が顯れてひつじかひにイエスが御むまれ遊ばした事を知らせたからひつじかひがキリストを尋れて來て……尋れてベツレムへ來たの。
姉さんもイエスを尋れて行くの子ー、もしイエスのキリストがいらしつたら御寒いかどうだか見て來て頂戴よ、……それからどうしたの？
キリストは天にいらしつて學校にはいらつしやらないから。
ソヲ天にいらつしやるの……ベツレヘムの天に……羊かひも博士も星を見て天に行たの……姉さんも天に行くの、羽根がなくつて天に行くの。
困る事子ー姉さんは死でから天に行くの、ベツレヘム……
デハ姉さんは死にゝ行くのベツレヘムへ？
イーエ
でも學校へ行くのだか天に行くのだかベツレヘムに行くのだか死にゝ行くのだか何處へ行のだか分らないは。
姉さんも御前がいろ〳〵の事を云ふから分らなくなつて仕舞ました、本さうに子供を教へるには自分がしつかりしないといけない事……
ヨー姉さんは何處へ行くの姉さん……よう、姉さん。
姉さんは學校へさ。
姉さん學校へ行くのは御よしなさいよう。
ナゼ？
でも、今日はクルシミマス（苦しみマス）よ。
イーエ樂しひのだもの。
そうだからわからない苦しひかと思へばたのしひと御つしやるし學校へ行くかと思へば博士が星を見たと御つしやるし羽根のないひつじかひが天に行くと姉さんはベツレヘムへ死に行くと御つしやるし、玉ちやんには少しもわからないわ
姉さんにも分らなくなつて仕舞ました……モー仕方がない學校へ行て先生に伺がひましよう玉ちやんもクリスマスを見たら分るだらうし姉さんも分らない處を先生にうかゞひましよう。
姉さん何處の學校へ行くの。
明治女學校へ。
今日行くの。
ハー女子教育の學校へ。
ソー是非今日行くの學校へ……今日行く事が出來たらスツカリわかりましよう子ー？
ソー教育の事が出來れば何でも分りますよ。
姉さん。
ナニ。
玉ちやんも學校へ行きたいわ。
ソンナラ、サー兩人して行きましよう。

○日本の菓子

坪井二郎氏は本郷岡野屋のいまさか、同じくもなか、美倉橋通り鶴屋の餡、本郷藤村の蕎麥饅頭、本郷岡野の蕎麥饅頭、若松町風月堂の蕎麥饅頭などを分析し、遂に斷定を下す樣、日本菓子の中には有要なる蛋白質の少くして却て消化を害する砂糖多きが故に現今の菓子の製法は贊成すると能はざるものにて必らず改良を加へざる可らず、現時世間一般菓子の需要の多き其製造高及賣上高等を一見すれば殆んど喫驚するに足れり而して其需要の目的たる一般の食物と爲すに非ず又營養の爲に用ふるに非ずして只に一時の嗜好を充たすに止まるのみ、且つ之を食すれば消化を妨げ酸敗を起す健康なる人にして且つ然り况んや病人に於てをや、試に病家の病室を一見せよ枕頭殆んど菓子折なきはなし之を喫するが爲に消化を害し營養を妨げ以て疾病をして增惡せしむると蓋し少なからざる可し、近來衛生會に於て醫家たり衛生家たるもの切りにアルコール毒の有害なるとを唱道し又禁酒會節酒會等の會を設け又特に雜誌を發行するに至る盛んなりと云ふべし然るに菓子の害に至ては之を顧るもの比較的少なきが如し是れ必竟酒の如く其害道德上に渉らず又銘酊亂暴等の形跡上に害を示さゞるに由るべしと云へども吾人の健康を傷害する點に至ては菓子も論外に置く可らざるもの也と。

○婦人洋服の害

ウヰルラード女史は、去十一月の米國婦人禁酒會大會に於て例の如く會頭年回演説を爲したる中に嚴しく婦人洋裝の弊害を論じてコルセットの類の大毒あるとを證し、

若しエヂソン氏の腰を蜂の如くなる程に〆めたらば、最早や發明を爲すの力あるまじ、ビスマーック氏の背に張りを壓し付けたらば獨逸の聯邦は遠からずして破るべし、ロバートブローニンにコルセットを固くせしめたらば又た美なる詩吟を聞くとを得じ、パーチルにペチコートを穿たしめば自治案は到底行はるゝ望みあらじ、余にして若し投票の權を有するとせば、明日シカゴ府に赴きて知事の撰擧に一票を投ぜんよりも、今日蜂の如き腰、道ぼうきの如き裾、駱駝の如き後ろを作る女服に反對するの十字軍に加擔し一臂の力を呈すべし、

と迄でに痛論わりぬ。

小説

附録に小説が多くあり升から、茲には載ません、次號よりは新作を掲げます。

郵便局の役人　之は少し重いから、モウ一枚張らなくてはイカンぞ。

田舍風の婦人　其うへ張りましたら尚の事重くなりはしませんか。

寄書

○賢女の爲めに泣く　　星野愼

忽然として東嶺金風を感ず之れ西山より來りし波動なり、草を撫で水を動かし漸く廣く漸く强く、樹を鳴らし砂を捲き勢ひ全土を蔽すに至りき、之れ女子教育てふ美風之れなりしなり、晨に盛ふるの士立ち奔り、怒ろに助くるの義人泣て女友となる、其聲其涙は瓦斯躰となりては日本國土を掩ひ、液躰となりては女流間を流る而して固躰となりては如何、即ち女學校堂の聳然として雲間に笑ふあり、予亦恰然祝して以て流俗たるなり、質に崇樹たり而して又愁然たり、予を之れ最も喜ばしむるもの而して予を最も憂へしむるもの何ぞ夫れ此甚しきや、女子教育の方針一轉一躍、直譯的に失し保守的に失し拜西的に失す而して以て先進の犧牲者は今日の改良者となり今や將に完全に向て進歩しつゝあるなり予は其必ず佳人を出し女傑を出し賢母賢出するを知る之れを知ると同時に愈々心樞かならず予は今他に向て一喙を容るの必用なし否寧ろ滿足して喜ぶなり然りと雖ども將に大に泣かんとするものあるを如何せん。本邦教育家未だ悉く日本女子を知るものならじ否知らざるにあらず觀察遑あらざるなり予は校舍出身の才女賢婦多くを見、多くを知る、之を見之れを知る毎に實に悲哀を感ずると多かりし、彼れは多病ならずんば陰鬱なり强健者あるなし殆どあるなし、有爲の冠は額上に輝けども躰勢贏弱の悲嘆に罹る、幾多の險山を攀ぢ峻秀峰上旗幟を立んとするとき氣力已に衰乏して離逝かず、噫兮噫兮汝を奈何せん、教育者何ぞ莫邪を錬るに鋭意にして庫隅に埋むを吝まざるの甚しきや、予之を醫に聽く昨今女子の贏弱多病たる多く榮養不足より來る貧血に基し、貧血は滋養の供求其需用に足らざるにありと此に於てか食物改良論起り校舍の食卓稍々注意に進めり予は此點に付ても暫く論するを止むべし、抑々腦髓消費稍多量の滋養分を要するものあらざるべく又書生の腦髓を消費するや甚だ過度なり故に之れが需用を請求するや莫大なるべし、非書生派即ち是れ迄の女子亦多病者少きにあらずと雖ども就學せざる以上は辛ふじて之れを支へ來りし也然れども一囘校舍に入る者豈能く久しきを支ふるを得んや今試に泰西女書生を以て本邦女生に比せんか、彼れは腦髓消費に對する活潑躰育と滋養食物と之れあり此れは腦髓消費は彼れに尚一歩を進ましむる程なるに有名無實の躰育論と改食論との内に晏如たり予之れを思ふ毎に恐懼悚然たらずんばあらず然らば滋養食物を急務とせんか之固より然らしむべしと雖とも一方には經濟の制限ありて未だ俄に充分の發達を望むべからず好し此制限なしとするも其滋養食物は極て容積を縮小すべきを研究せざるを得ず何となれば女生の食量は概して積學年度に反比して減量するの傾きあり以て小量なりと斷言するを得べし予は暫く此受働的(パッシーブ)の注意を首はず寧ろ大に自働的(アクチーブ)の法方を欲す即ち其胃腑を大にし健にせよと大呼するなり之れを爲すと naturally 共に運動に之れあり此運動の法方に付てこそ予が一言を欲する所なり。

予は屢々各女學校内に躰操を見たり遊技を見たり何れも皆立派なる泰西風に相違なかりし然れども其躰操や兒戯に等し、衣服制の致す所なるべしと雖ども動作不活潑態度甚だ醜くし此の如くして修練するも其運動たるに足らじ之れを勉むるも技術となすに足らじ何を苦んでか此不適當なるものを强ひて用ひんと欲するや嗚呼予は之れを尙直譯的の餘臭と云はざるを得ず、予は謹で一策を献ぜんと欲す乞ふ輕々皮視する勿れ予は運動を年齡に應じて三種に分たんとす(第一)室外遊技：年齡に關せず、(第二)躰操：十四五才迄、(第三)武技：十四五才以上。

第一室外遊技は常に之れを許し且敎へ、時を定めて賞品を以て奬勵す要するに從前に奬勵を加へしに過ぎず。

第二は之れ柔軟躰操にして從來の儘にても可なり十四五才の小女迄は自ら今少し活潑ならしむるを得べし。

第三武技は之れ予が熱心唱道するの主眼なり、武技に種々あり先女性術中薙刀術を以て適當とはするなり今突如として此文字を見るの教育家あらば或は冷然斥却時として失笑する者あらん若し之れあらば予は此教育家を悲まざるを得ず、思に現今熊に教育に從事する者は重に其思想泰西學より發達し來れる秀士なり然る故に注意の日本武技に粗漏なるや怪むに足らず又武文兩社會に跨立て大眼を開くの

先生多からじ武界の達人は頑として文の高尚を知らず以て漫に慷慨し文界の秀士は冷として武の眞性を知らず以て徒に冷待す加納學士は能く之れに跨立するものなり故に學習院武氣凛たり。抑も武技は凶器にあらず亂世の所有物にもあらず人或は粗暴驕傲野粗たらしむるを疑ふものあらば實に之れ不幸の人なり予は武技の結果を説明して其精神を知らんとを望む、之を述ぶるに左の如く擧ぐべし、

精神の進歩〔内にあるの眞勇生ず故に怯懦を矯め沈着大膽ならしめ即ち温柔ならしむ、外にあるの蠻勇滅す故に輕噪を矯め柔和たらしむ、〕

體格の進歩〔體格を正し動作進退に敏捷ならしむ、血肉の發育最も著しく强健となるべし、〕

技術の進歩〔護身の機敏、護身の術、〕

之れを一言すれば温柔の淑女にして侵すべからざるの威風を有し事に當て愈々沈勇生ず一日の標本は過去武士の妻女に高尙の文學思想を有せしめしもの之れなり且此技たるや之れを練習するに極めて柔に趣り漸々體力に應じて活潑となる故に普通女子の體力能く之れを學ぶを得べし且之れを學ぶに漸く深入するに從ひ愈々其妙を知り張り合ひ生ずるを以て研究するに難からじ、夫れ單一なる説明を以ても尙其體育外に人性上の有益を知るを得べし之れ決して過稱ならず實に熱心以て其實を説くのみ然れども予は之れを大早計にも直に大に用ふべしと云ふに非ず先つ校内有志の女生をして其時間を與へ徐々として之れを履行し以て其標本を示さば默示の傳道、後來の勢ひ期すべきなり予は更に狂躍するものあり日本女子の精神實に頼母しきものあることこれなり試に潑剌たる女子に向ふて武技習練の諾否を問はゞ如何、彼等多くは欣然熱望するなるべし蓋し之れ武時代の餘粹なり尙武の餘脉なり。

予は家鴨行軍狀の洋裝婦人を見る毎に一嘆、不生色の若婦人を見る毎に一嘆、戰々兢々潜行するの婦人を見る毎に一嘆、惡車夫の冷笑無禮は女權衰亡の兆候と感ずる毎に又一嘆、百嘆交々來り予をして「ウエルリントン」將軍の假聲を發せしむるなり、嗚呼「ウチートルロー」の捷戰は一に此「エトン」運動場に基すと、然れども予や馘首を持ち歸らずんば盾に乘て歸れと云ふ如き妻女と誤つものにあらず精神のある所ろは唯だ一滴の涙のみ致へて他意あらざるなり、教育先生聽ゆるや否や。

閑書

○廢娼后の仁政に付きて　　牧野ふじ女

女學雜誌記者に呈す西洋の諺に先づ生活して然る后ち議論せんと言ことあり此の貴生の身を以て口を開くは恥ることと萬々なれども一言せざるを得ざるものあり幸に之れを宥るしたまえ去る十二月十二日貴君投書報知新聞第五千七十三號にあるを一讀し御明説然佩の外無之實に廢娼論は國の汚染を掃除するの最第一の美事にて誰か之を贊成せざる者有ん乎顧りみて此の數千の娼妓を如何せん古語に狐死すれば兎之れを悲むと共に三千餘萬内の女友なり察せざる可からず今や所として廢娼論のみなれども更に救助の方法なし彼れを殺せば是れを生かし非を去らば善を進むるは世の順なる者なり仁者よく之を憂る宗教家道徳家の亦よくする處ならんか夫れ聖主の義兵を揚けて暴國を征するや戰ひ勝ち害惡亡び去て後ち仁政を布く故に人民安堵の思をなすなり昔に關野專一のみならば山崩れ田荒れて返て惡鬼を増さんのみ殿には徳川覇府の中世閣老水野越前守氏世の驕奢を憂て大ひに節儉改革を令せしは今に人の知るところ第一に女髮結を廢せり女髮結なるもの他の婦女をして頭らに金玉を飾るの奢りをなさしむるのみに非ず或は醜體説を恥ず或は不品行の媒ちなすが故に疾く之れを惡む然れども猶これに木綿糸取り車を以て活路を教へたり凡娼妓たるもの娼妓たるを甘じ樂んで居るもの十中の一これありや百中の一も稀なり多は父兄親族の爲め獰手に掛りて土界に陷落せしもの又た憐まざる可けん乎世を擧て此非業を極論するならば世を擧て此救ひを極論せざる可からず願くは貴社能く之れを計れよ聖書路加傳五章にわが來るは義人を召く爲に非ず罪ある人を召て悔改めさせんが爲なりと已に悔改めたりとならば救はざるを得ず癩病已に癒よりも白くなれりとならば無限榮えかぎりなき命の道を不教を不得が如きもの也(上州北甘樂郡谷岡製紙場前)

文詢

問の部

(一五)。寶笥の木が虫ばみて困ります、左程甚るい寶笥では無いのですが、何故でしやう、又どうしたら善いでしやう(新嫁)。

(一六)。女の人が讀んで大抵世間の事の知れる新聞は何んでしやうか(今戸木の主人)。

(此十六の問は可成く廣くお答を願ひ升、編者白)

答の部

(一四)　文學とは何かと云ふとに付ては色々說があります、先づ外國にては之をリテラチウラと云ひ升が、リテラチウラは何を云ふかと申すとに爲ると古來殆んど一定したる議論が無いです、タシタスはいろはの形を云ひ、シスロは學問の事

を云ひ、クインチリアンは文典を云ひ、シスモンチ、ハラムなどは初めて文學歴史を作りたる大家なれども文學の字義に付ては明かに言わず、其他佛國にてはアンピール、リツトル、ビルレメーン、バチン、セントビウブ、テーン、獨逸にてはゲルビナス、コバースチン、ヘツトナー、シーレル、ブルン、ライフル、クレーマー、シユレーゲル、英國にてはボスチツト、ハラム、ブルツク、ヤングなどの說を調べて見ましたが皆な分りません。然し其の種々の解釋を類別しますと、第一はチイヅチルス、デクヰンセー等の如く書物を智識の書、能力の書の二つに分ち學術法律言語等を甲とし、詩歌史論文などを乙とし而して此の乙のみを文とも文學とも云ふの說、第二は讀者に樂みを得さする文をリテラチユアと云ふ、故に散文にても此義にて書かざれば文に非ずと云ひ佛蘭西の所云るベルス、レトルのみを文とするの說、第三は凡そ書物に書きたるは皆な文なりと云ふハラムなどの說、第四は人生及び人間を目的として考と語とを以て人の思を現わしたるものは皆な文なりと云ふシユレーゲルなどの說、以上凡そ四つですが之を要するに何ものをも文と云ふ說と、麗文のみを文と云ふ說との二つとなるですが、斯る別ち方で區別するのは分らぬとです。スペンサーは學術と詩と混和すべしと云ひ、ゲーテのフハウスト又はウイリアム、マイステルは學術論多くして而も詩です、況して人の樂しと思ふ所ろも人々異なる上に學術者は學術の文を以て最上の趣味あるものとしハムボルトなどは天地宇宙のコスモスを以て一の大文章なりと認めたでしやうから必竟學術的だとか麗文的だとか娛樂的だとか勸誘的だとか云ふやうなとを以て文學を解するとは出來ないでありましやう。故に私は斯う信じて居ります云く文は人心の聲なり、人心に智情意の三あるを以て文にも亦た三の趣きあり、多く意より現わるゝものは雄辯文の如く人を鼓舞勵奬するです、專はら智より出るものには記載する類傳話する類論述する類といろ〳〵あります、又重もに情より出るものは詩となり小說となり戯曲となります、而して智情意の三は常に混雜して居りますから現はれたる文章にも亦色々混雜して居ますが、つまり人心の溢たるに違ひないです、デ文の形には散文と韻文の二つはありますが、文學文章とは何かとお尋ねがあれば人心の聲なり寫眞なりと斷言して宜しからうと信じて居ります。

次に樂しき夫婦と云ふとに付きくても私しの說を述べたいですが、前の答が余り長くなりましたから追てお答へするとし茲には一言丈け申して置ます、即はち樂しき夫婦の事に付ては前年女學雜誌に「日本の家族」と云ふ論文が見へました、あれを御覽になつたらば宜しからうと存じます。(撫象子)。

●越中上新川郡賤讀者　第百九十號に載せた寒氣と女生徒の項のペテコートとは、つまり下着の前を縫ひ付け丸ろく底のない袋の樣に仕立てるのですが、之にヒダを付け遊き自由に廣がる工合にして置けば步行にも不便を感じません●大坂柴田氏　月の大小を覺えるにはチヤ指を除き人さし指から初めて一二三四五六七と算へ再たび前にもどりて八九十十一十二と算へるので、其時指の先に當つたのが大で、股の所ろ即ち下に當つたのが小と見れば直きに覺へられます、一が人さし指の頭まで大、二が其の下で小と云ふ樣に、高い所ろが大、抵い所ろが小と覺えて居るのです●長崎某女學校の一教師　女生徒は元來なまけるものでは無いので、大抵は勉强仕過るほどのものです、夫が左樣に怠つたり、欠席したり、又コスイ事をして教師の目を晧ますと云ふのは、必らずしも女生徒のみの惡るいのでは有ますまい、必竟教へ方が余り六かしひか、又は科業が多すぎて、十分に仕度が出來ないからでありましやう、即はち怠けるのでは無くて人に負けるのが口惜しと云ふ女の情から、いつも欠席もする、目を盜んで字引も見ると云ふ樣になるのでありましやう、ですから無論罰を以て之を止めやうなどとなさるのは宜しくないので、先生方が深く自省なさるが至當かと思ひます、スペンサーの教育論にも余計に教ゆる教師は何も教へないで子供の頭を破るのだとありますが實に左樣です。又五年位ひの科目ならは、代數はお止めなさつた方が宜しひでしやう、寧ろ幾何計りをなさる方が益かも知れません。●運動の事は本號に其說があり升から一讀を願ひ升●一讀者　しのぶトカ、かすみトカある隱し名の本名を一々掲げよとの御命、有がたきやうにて情けなし、虛無僧に對しては冠り物とれと言はぬが士らいの心とも聞きました●松井娘　土左衛門と云ふは相撲取の名で、夫が水に溺れた時の事から惣じて左樣に言ふとゝなつたので、水に溺れたを土と云ふは何如になどの大した譯はれは無いです、新年早々かゝるお話しは流して仕舞ひ度です●駿河竹早町ＨＳ　近來流行の古小說家に自笑とか其碩とか八文字屋とか江島屋とか申しますが之は別人か同人かとの問、其碩は江島屋と稱し曲三味線、色三味線、契情禁短氣などを作つた戯作者ですが、其友人に八文字屋と號したる自笑と云ふ本屋で亦た戯作をした人がありました、其碩は最初其著書を自笑の名にして出版したので后ち名が高くなつてから自からの名で公けにしましたのです●駿台田澤錦子　神田本鄕麴町三區の内にて自宅にて英學を教ゆる人は無きやとの問、之は澤山あり升、然し確かなは何處かの女學校に出る教師に就て教はるか又は其の周旋を請はるゝが宜しひです●北總學人　禁酒會は日本中で四五十ですが、禁酒主義に賛成の會は合せて百五六もあります何れ其內ち表にして御覽に入れましやう。

時事

○內閣及官制の變動

明治十八年十二月廿二日の內閣職權は、去廿二年十二月廿四日の內閣官制に改まり、之と同時に總理、外務、農商務の三大臣に變動ありたり、而して大隈伯は樞密顧問官となり、井上勝氏の如きは麝香間詣祗侯とか云ふ華族の隱居役の如きものとなりたり、兎角物事は發表したる表面丈にては分らぬものなり、若し表面より見れば元の諸大臣は大抵失敗したるが如し、大隈伯は足を失へる上に外務大臣の地位を失ひ、伊藤伯は樞密院議長の重職を失へる上に高輪の自邸をも失はんとし、井上伯に至ては殆んど元老院裏の一廚の元老院室に退隱したる如くにも見ゆるなり。然るに新に外務大臣となりたる青木周藏子、並に農商務大臣に昇りたる岩村通俊君は井上伯親近の同志者にして、折田平內君に代りたる田中光顯子は伊藤伯昵近の人なり、而して內閣官制は井上伯年來の持說の如く總理と云ふ趣きより議長と云ふべき資格に移りたり、然らば此度の變動に關する井上伯の權力消長を推論するを得べし。兎角實際の事は外形もしくは文章などに關せぬもの也、今の內閣の外に一種の重力あるを知らば、今の內閣官制の外にも亦た無言の官制あるを知るべし、社會の流れは下に蟠潮を存す、表面の一波一動はたゞ此の下底の激する所によるのみと悟れ。

○潛勢力

但し山を出でざる以前の安石孔明は、出山后の丞相にも優れる感化力を發す、今や黑相公は鍋を畜ひ、隈伯は田を耕し、幾多の壯人は憤慨して腕を撫するなり、大同團結派がいよ〳〵政府に大同すると共に改進派はいよ〳〵お上より退ぞき、昔しの自由壯士やゝ穩やかとなると共に前日の智識あり財產あり名望あるの紳士は更に西南魁豪の雄氣と同化し來らんとす。

○新聞界の內閣變動

之も時々には起らんとを祈る、政府のいつも〳〵同風采なる餘り面白くなけれど、新聞屋の趣きの年中同調子なるに至つては一層面白くなし、多少其若手の記者中には變わりあるやうなれど其內閣に至てはいつも同じきが如し、願くは之にも年末每に變革あらんとを、但し其記者中の重なる人が半年一年づゝ外國を巡禮して來らるゝも一の良法なり、其人々が外國の風景に喫驚したる記事などの出づるは幾分の慰めなり、小說にては外國の內輪を穴の明くほど承知して居つても、我同胞が之を見て驚いたと云ふビツクリの仕風を聞くのも亦面白きものにてある也。

○空論、批評、實行

漫に彼此と批評する阔目の人には八日あり、左程でなき人物でも少しは氣の附くもの也、故に思へらく乃公もし代つて爲さばあの樣な事を爲さすと、然るに此人實際に當つて之を行ひ見れば何の名方もなく、則はち懷古痛恨して坐ろに涙を落すと也、政治を評論する新聞記者は如此し、新聞を批評する讀者は如此し。

○季に隨つて衣服を更ゆ

冬には綿入を着、夏には帷子を着る、轉々變換するは週環して元の品を用ひんが爲め也、位に登れば之を惡口し、隱居して草木を弄べば激賞す、古し位を棄てゝ世を隱れたるものには多少の明臣もありしなるべし、今日輿論に適はずして職を離れたるに何の貸むべきとかあらん、若し草木を弄ぶが高尙にてあらば植木師は皆な聖人ならん。

○條約改正の成行

諸公は何如にせらるゝ積りなるや、亦民間の中止論者は何如に爲す積りなるや、談判を中折せしめ、大臣の足を失なわしめ、內閣を變動せしめ、政務を澁滯せしめ、而して后ち勝手氣儘に東西南北に散じ家に歸り酒を飲み細君の頭を擲ぐり、或は同志相ひ喧嘩をして再興だの發表だの分離だのと騷ぎ廻る、此等が必らず惡しきにあられど之丈けにて了るならば實に惡しきと也。

○政鸞に花を見る

板垣伯の高義多情實に美觀なり、中江君の多感涙漣々又對双の美事なり、政事法律道德共に同根に歸す、政台に情緖の花開くを見て甚はだ快ちよし。

○今年の女學界

今年の女學界は去年よりも望み多し、流行的の輕薄者はいよ〳〵此社界を見棄て恰かも西隅の天に走りてゴロ〳〵と鳴り響くなるべし、天上潔快、雲氣明晴、今年こそ最と靜かに女子教育の根本を固むるの年なれ。而して更に喜こぶべきは今年には眞の詩少しは萌え出づべけん、小說にも戲作にも冷々輕薄なる批評にも人は既に厭きを催うせり、今后忙絕紛亂なる政事界を融和するものは只だ眞の女學生と、眞の詩にてあるべし、讀者此の預言者の妄想當るや否やを判斷せよ。

○濁裏清風　（つゞき）

東京に於ける廢娼會發起者は、去廿三日銀座靑年會に集り、相談したり、湯淺二郎君議長となり四十餘名列席して會議す、其末小島官吾、伴直之介、石島良三郎、壯年廢娼議會員、及び巖本善治の五名を以て委員とし議案を草せしめ、更に來月第二會を開きくとゝなりたり、去廿八日は下谷教會に於て明四日は築土教會に於て巖本の演說あり、又來四日厚生館に於て廢娼大演說あるべし。

前橋に於ては、來る五日廢娼大懇親會を開らき廢娼同盟會の事に付きて相談あるよし。且つ上毛靑年社よりは上毛靑年の初陣とし且つ廢娼論壇先登第一と冠する新書出版せらる。

大坂に於ては、去廿二日の市部會にて來廿三年度より娼妓の賦金を減額せん爲め更正議案の下附を知事に請はんとの說多數にて議長より知事に建議したり。

栃木縣に於ては、去廿四日福島一造と田祐二郎兩氏より廢娼の建議あり、時日切迫して充分討議の暇あらざりしにより明年迄で其議を机上に置くヿとしたり、其日出席者三十一名、建議に反對したるものは僅に四名なりき。
新潟縣に於ても加藤勝彌松村文二郎二氏より建議したれ共少數にて消滅したり。
宮城縣に於ては、五名に對する廿六名の多數を以て去廿三日明治二十六年限り廢娼するヿに議決したり。

○廢娼論參考

六醜地の娼妓現員表　（去年十二月一日調）

揚代金格	一、〇〇円	、八〇	、七五	、六八	、六〇	、五〇	、四〇	、三五	、三〇	、二九	、二八	、二五	、二二	、二〇	、一八	、一二	小計
吉原	一二三		七三		一二	四	七九	一二四	一六一	一一二	一〇五	一四七一		三一			二二九五
洲崎	二八		四六		一	二〇	三二	一七	九六			八七六					一一一六
品川		四〇		五	一				四一			四二五		五四	五九	一一	四六四
千住					二						四六二						四六四
板橋												一四〇		一六			一五六
新宿								一二一	一〇		七一	一七	二五	三七			二八一
計	一五一	四〇	一一九	五	一四	二四	一一三	二六二	三〇八	一一二	六三八	二九二九	二五	一三八	五九	一一	四九四八

洲崎埋立地入費

洲崎埋立は明治十九年八月着手同二十二年九月竣工にて、埋立工費總計六万五千六百三十二圓九十一錢九厘、外下水修繕費一万三千八百九十四圓六十三錢、二口合計七万四千五百二十七圓五十四錢九厘にて向ふ十ヶ年にて同遊廓より返却の見込なり、廢娼と共に僅かに七万圓の金を失ふとて掛念するは何の事ぞ。

娼妓奉公周旋人

吉原などより各地方に周旋人を出し奉公人を誘ふには種々の惡むべき弊ある由にて、百圓の前借にて約束したるものは到底四十五六圓しか手に入らず殘りは手數料旅費宿泊費など稱して周旋人に取らる、而して奉公人となるものゝ三割は困窮して自から賴み込むものあれども其七割以上は皆な欺かれ誘われて遊廓に住込むヿとなるものゝ由、實地に精しき者確報せり。

府會建議廢案起立者

東京府會に於ける廢娼建議を議するとき、出席者四十六名なりしが、前號附錄に示せし如き議論の末いよ〳〵廢案となりし時之に起立したる二十八名は左の諸氏なりしと從ゆ、

藤田茂吉、神田兵邦、橋爪惟信、鳥山貞利、浦田治平、稻田政吉、淺野彥兵衛、須藤時一郎、仁科久米二郎、島田彌左衛門、渡部温、木許安敦、青木匡、角田眞平、金澤三右衛門、太田實信、松尾清次郎、豐川周作、田中篤閣、荻田藤一郎、桐原捨三、仁杉英、青木金七、風間信吉、鈴木信任、川村治兵衛。

新誌

○窮民の活路

吾人は時事新報と共に太たく窮民の活路の爲めに憂ふ、之が爲に計るに唯だ三つの法あり、政務を簡にして租稅を減ずるヿ、特別保護の情實を全滅して職業界を自由にする事、北海道に移住せしむる事、以上三なり、新今ま其第三法を說く、文字純厚にして感血洋々たり、吾人愛讀して窮民の爲に謝す。

○北邙散士の小說論

柵草帋第三號に方內齋主人に答ふ北邙散士の文あり、多情高潔にして其衷心を現わし讀者をして泣かしむ、末段に云く、

成形、生動は小說に欠く可らざる約束ですが、然し其計りでは足りません、成形生動を一貫して彼圓滿をほのめかす高邁を失つてはなりません、若し高邁を失ふと其生動は三馬の浮世風呂、私のくされ玉子になります、私は今まくされ玉子を讀んで自ら其臭氣にむせびます、唯だ高邁を失はぬ人のみ男女の相抱く春畫を畫いても美で、殘酷目を掩ふべき人殺を描いても美で、卑劣面に唾すべき盜賊を描いても美です、此美を身に得るには無窮圓滿を感得せねばなりません、

吾人初めて全然同意見の小說論を得たり、嘗て「流轉」を評して一種の神氣貫通するに驚ろき歎唱措く能わざりしが、今に至りて其の著者は果して亦た嵯峨の屋氏なりしヿを確かめ得たり、嵯峨の屋君乞ふ「腐れ玉子」に對する吾人が昨日の失言を容し、且つ道の爲にいよ〳〵淸健にして異日俗世界に光燦爛を發てよ。

女報

○倉橋行子　先日特旨を以て從六位に叙せられたる倉橋行子は去る二十日卒去したり。

○看護婦教育所　芝區愛宕町の東京慈惠醫院構内に設置せる看護婦教育所生徒七十餘名は去る二十五日クリスマス祭を開き演説及び音曲其他遊藝を催したる由。

○女子教育奬勵會　麹町區永田町なる女子教育奬勵會の東京女學館は此程第一會の報告をなせしが元來同會は土方子爵、澁澤榮一、外山正一、增島六一郎の四氏委員となり專ら盡力奬勵せられ次第に隆盛に至りし由にて女學館へは當分の內何時にても生徒の入學を許す由。

○大坂高等女學校　にては去る二十三日卒業生徒の證書授與式を執行したり。

○工女の募集　江州高島郡の婦女子は他地方の婦女子よりも一層忍耐に富める由にて大坂金巾製織會社より同郡の各村長へ依賴して十一歲以上十四五歲以下の工女四十名を募集するど云ふ。

○養蠶會社　京都養蠶會社にては今度宇治郡山科村に桑園を購入したるに付同所へ數棟の家屋を建築し養蠶法の傳習を終りたる者を居住せしめ養蠶の傍ら養雞の業に從事せしむる計畫中なりと。

○高等養蠶製糸傳習所　奈良縣に於ては明年の春蠶期より高等養蠶傳習所を開設して縣下の生徒を募集し益々蠶業の盛大ならんとを圖り居る由にて右傳習所費用は勸業費中に此費目を設け地方稅より支辨することゝ爲すやに聞及べり。

○梅花餘香　大坂梅花女學校内より梅花餘香と云ふを發兌し既に第四輯迄に至りしが、此度び同女學校の外に、同志社女學校及び英和女學校の二校も加わり、文學奬勵、三校の交際、女學の開進等を目的として一の淑德雜誌とも云ふべきものを發兌することゝなり、則はち前の梅花餘香を廢刊せり。

○頴島衞生婦人會　其第一會を去月八日に開き今月上旬亦第二會あるよし。

○雜誌に女の助勢　標準と云ふ雜誌の第一號が出ました、牧師星野光多氏の編輯ですが、第一號には同氏の妹君及其友よしえ子の文あり、英文は長谷川みれ子作らるゝ由にて、特にデョー教師非常に盡力せらるゝ趣き、初めより婦人の助勢ある雜誌と云へば坐ろになつかしいです。

○大坂　ウイリアムハン嬢は照暗女學校に寄附金一万七千圓を得て校舍新築に着手せんとし、ツリウラム嬢の審永生女學校も亦た万餘の金にて新立せられんとす。

○米國婦人禁酒會第十六年會　は例の如く十一月八日より十二日迄でボストン府にて開かる、出席する委員四百六十五人にて去年よりは五十三人の增加なり、子バダ州の外は各州より、ウター及アイチミンの外は各領より委員來れり、會の議事中エレン、フホスター夫人は右禁酒會が禁酒黨と連合するの不可なるとを主張しアイチア出身の他の議員と共に一時退席したるほどなるが、其局に至り更に此事を議したるに動議廢棄せられ矢張り元の如く禁酒黨に連合するとになれり。

○正誤　前號離婚者に惠める古着の項は品數二千二百八十八品外に十一包の誤なり

○社員　內田不知庵は此度都合により脫社いたせど遠からざる中ち吾社に同主義の新聞紙に從事すべく而して女學雜誌には折々投書せらるべし。巖本は昨年末より今春に掛け近縣旅行中に付き年頭の祝儀を欠く。

週報

○官令　二十一日勅令第百三十號を以て運用術練習艦條例を廢し高等水兵練習艦條例を裁可公布せらる同日勅令第百三十一號を以て砲術練習艦條例改正の件同第百三十二號を以て水雷術練習艦條例の改正を裁可公布せらる●二十三日勅令第百三十三號を以て傷痍恩給を受け文官に任じたる者恩給支給の件同第百三十四號を以て海軍懲罰例の改正を裁可公布せらる●二十五日勅令第百三十六號を以て地方官々制中追加の件同第百三十七號を以て札幌農學校卒業生任用の件を裁可公布せらる●二十六日勅令第百三十八號を以て東宮武官の制を裁可公布せらる

○政治　二十四日內閣會議に各大臣は參集せられたりと●二十五日三條內府の兼官を免じ山縣有朋氏總理大臣に青木周藏氏外務大臣に岩村通俊氏農商務大臣に大木喬任氏樞密院議長に柳原前光元老院議長に任じ而して大隈重信氏を樞密顧問官に任じ(大臣待遇)折田平內氏栃木縣知事に任じ田中光顯氏代つて警視總監に任ぜらる●二十五日內務大臣は各地方長官へ訓令を發せり●二十六日臨時閣事會議を開かれ山縣、西鄕、山田、大山、榎本、後藤、青木、岩村、各大臣は參集したり

○會社　井上鐵道局長は去る二十一日歸京せり●米商會所は去る二十七日納會せり

○新誌　東京公論は來年一月より改題するよし●二十二日讀賣新聞解停せらる●二十四日大坂の天狗評林第一號は停止せらる●報知新聞及國民新聞に一月より改正するよし

○叢報　二十日清元家內病死せり

化學的醫學的元理應用 **實効確證新發明法** 教授廣告

今や社會の進歩恰も旭日の東天に昇るが如く工藝技術の事業日に開け月に進む此時に際し獨立富榮を計らんと欲する者は憤發激勵目に見る所耳に觸るゝ所苟も過益利便なることは其理を究め其効を遂げ所謂天地の化育を贊くるの心を以て心となし國に益し己れを利し獨立の民たることを圖らざる可らず是れ本館が曩に別科傳授部を開設せし所以なり今や一層進んで別科部の業務を擴張し現今泰西各國にて專ら流行する所の諸發明法**健全學及び人身審美術**幷に本館主多年修學上より得し成蹟諸術又實地經驗上より得し諸秘法等を極めて低廉なる薄謝料にて廣く有志の諸君に傳授し以て共に與に公益濟世の妙術を普及せしめんとす

- ● 男女全體の色を白くし且美艷ならしむる新法
- ● わきがを必治する新法
- ● 遺精病を必治する新法
- ● たん病を即治する新法
- ● 肺病患者吐血防止新法
- ● ひぜん病を即治する新法
- ● 婦人月經(白血長血)を治する新法
- ● にきびを即治する新法
- ● 口中の臭氣を除く新法
- ● 淸酒の腐敗を防ぐ新法

- ● 醤油の黴るを防ぐ新法
- ● 毛を必ずはやす新法
- ● 麻病を即治する新法
- ● 消渇(せうかち)を即治する新法
- ● そばかすを取る新法
- ● 痔疾を即治する新法
- ● 齒痛を即治する新法
- ● 美艷漆黒白髪染の一大新法
- ● ひび、あかぎれしもやけ不發豫防新法
- ● あざを除去する新法
- ● 癲癇を治する新法
- ● はくろを除く新法
- ● 縮れ毛を直す新法
- ● 白黒なまず必治新法
- ● たむし必治新法

●古綿漂白新法

●棄綿製造新法

●婦人乳の少なきを出す新法

以上各新法凡て一法に付き謝金壹圓五十錢宛にて傳授すべし有志者速に申込あれ●送金は郵便小爲替にて東京神田郵便局を拂渡局とし其手形を野上三省あて郵送有べし着金の即日詳細確實なる傳授書を郵送すべし●右各種の發明新法ハ皆化學的醫學的の元理に基き且つ多年の實驗を經たる新術なればその實効を奏するは堅く保證すべし

傳習濟み實驗の上もし其効なき等ことあらば何法にても傳習謝金は直に返却することを誓ふ確法なり

●本館の諸傳授法は既に其奏効確實なること全國一般有志者の信認を得昨冬よりは外國人よりも續々傳習申込有之殊に前記の如き責任ある傳授なれば此頃各地に於て種々の傳授廣告を出す窮書生輩の摸倣的無効の僞法傳授とは元より同日の比にあらざれば玉瓦相混同視するよなかれ●

●尚ほ詳細なる各種傳授科目規則書を一覽せんことを望む方は切手四錢封送あれば直に送呈すべし

●日本新聞　日本授産館　神田區末廣町拾番地野上三省氏の設立に係る同館は其發明せし各色改良染液法及び理化學的醫學的應用の諸發明新法共近來傳習志願者益々增加せしを以て更らに役員を增し本年は尙一層精勵事業の擴張を計らるゝと云ふ又近來は外國人の傳習申込も多く已に此程北米合衆國桑港マーケット街幷に同國ランカスター府チャーロット街よりも各傳習を請求し來りしと云ふ

●鳳曆回春の祝意を表する爲め一月卅日迄の傳習申込者に限り目下の時候に最も必用なる左の一新法を特別無料にて傳授すべし●但し此無料傳授は來る卅日限りに斷乎相廢止候事●故に本館諸發明新法傳習志望の方は右期日內に速に傳習申込あれば大に利益を得らるゝものなり

●美人とならんと欲する者は注意せよ

佛國新流行の化粧藥法●貴婦人淑女社會の最必要法

男　肌膚(いだ)を艶滑(つやよくなめらか)にし膚理(きめ)を
女　軟密(こまか)にする一大新法(いちだいしんぽう)

●粗糙質(あれしょう)の人は必ず右新法に注意せよ

東京神田末廣町拾番地
日本授産館

新發明各色改良染液正法及理化學的諸發明製法傳習所

館長　野上三省

顧問員　英人　エフ、ヘンリー

此外役員姓名ハ凡て略す

○　　　　　　湘烟女史

菟道作

三位碑邊秋寂々。四郎渡外月蒼々。行人不省興亡跡。一
帶斜陽爭野航。

九日書感

今年九日一長吁。不泛黄花不插萸。獨献尊親佳節酒。三
人兄弟兩人無。

靜子

妙舞細腰翠袖長。想夫戀恨入歌香。心中縷々亂難理。一
曲芳山淚萬行。

春遊

探春已幾家。散歩夕陽斜。人去疑無路。蝶飛知有花。
水而漲連岸。山根瘦嚙家。行人花幾樹。雙袖總紅霞。

琵琶湖

匹似洞庭雲夢秋。秋多滋賀古都頭。千峯萬岳一輪月。影
落蘋葭蘆荻流。

秋夜

十分秋色屬詩家。月送風涼飜露華。坐怪紫雲凝不散。影
寒天竺一羅花。

右七首幼時作

宮中作

相交五大洲中客。相對三千里外山。曾在人間想天上。却
看天上亦人間。

賦得凝香梅一樹、十首之一

凝香梅一樹。栽在御溝西。縱被風霜壓。高枝不肎低。

宮中送母西歸

故園母與去。今歲母先還。父問宮中事。水晶簾不寒。

御題竹有佳色

猶想雙娥泣九嶷。暮霞春靄影迷離。何禁密雪朝回處。只
愛清風宿直時。獨寫虛心伴明月。欲書个字寄阿誰。一生
不着繁華夢。憐汝歲寒堪自持。

秋晚

籬花摧落雨濛々。墜葉搜禽日暮風。未寄秋衣秋已盡。深
愁人坐淺寒中。

宮中得家書

聞說故山雪。已爲幾尺深。雙親寒可想。夜々孰温衾。

春日

清愁一片結成詩。正是春寒如水時。月黯澹邊草離離。夢
凄迷處草離披。

下土州舟中

昨日洛城塵。今宵千里客。只看月趁舟。潮滿乾坤碧。

偶吟

從脫錦衣魂夢安。明窓高臥日三竿。想曾立揭御簾手。岳雪終朝題句看。

瓊浦客中

秋風昨夜透窓沙。夢裡故園天一涯。殘淚痕濺小詩冊。新憔悴照舊菱華。嫣嬌不費初三月。節操唯題晚歲花。破傘敝衣君莫笑。滿腔山岳獨堪誇。

抱灣山色綠髩髻。蟲語閙時露氣凝。夜冷高樓淸無夢。板橋秋日水晶燈。

下東肥球摩川之一

藍波雪浪一灣々。紫霧紅嵐山又山。十月淺寒天欲晚。追隨倦鳥懶雲還。

題畫

有客訪仙蹤。夜來雲氣濃。閑庭鶴影落。月在最高松。

偶成

百美叢中孰最誇。御簾風暖淡紅霞。宮人勝是姤春甚。曉起妝前不對花。

笠置山

苔深雲滑路難攀。日暮啼禽笠置山。無是濡衣昔年淚。松杉冷翠雨潸々。

滋賀獄中作之一

毋在客中兒獄中。愁雲恨雨愁將窮。寒燈不照夜如歲。誒殺遙天秋一鴻。

明治十八年韓人有襲我朝鮮領事舘淸人亦與害我士民因有此作

淸奴可膺師有名。淸奴不懲奈國是。我師有名淸奴驕。四方壯士投袂起。日本久藏日本刀。斬人如草利足恃。一以當百我武揚。今日之事有戰耳。君不見人生有死誰不死。死能殉國如不死。決眸勃海千萬里。夕陽如血波濤紫。



ふるは

下田歌子

ひと日、巖本善治主、わが、柴の戸を敲きて、舊詠の歌をと請はれぬ。何の料ぞと問へば、來ん年、新刊の冊誌に、載せんとてなりといはる。おのれ、幼き頃より、よみたるどもは、少なきにしもあらざりしかど、みな、石瓦のごと、何の光なき物のみなりしかば、今は、其かたはしもとゞめず。況て、心の底に殘りたるも、あらねば、いと、甚う困じて、手匣の中、掻い探り見るに、宮づかへしつる頃、仰せごとによりて、詠めるが、たゞ、僅かにありけり。それに此頃、物しつるを、一つ二つ書き加へて、參らせつ。さは新らしき年の門松、綠添ふらんわたりに、散りぼはんふる葉よ。いかに、片腹痛きわざあらんかし。

池水波靜

朝日影うつりそめたるかたにのみ　波はありともみゆる池哉

春月

手枕は花のふゞきに埋もれて　うたゝ寐寒し春のよの月

朝歸雁

寐さめして思ひたちけん今朝みれは　蘆邊の雁の數のすくなき

田舍にまかりける年の春よみたる歌の中に

大宮の御垣の櫻かさす日も　此頃ならしはるさめの降る

尋殘花

散りのこる花もやあると來し山は　わか里よりも夏めきにけり

梅雨

山梔の花にすかるの聲すなり　をやみにけらしさみたれの雨

海邊子規

かつを釣るあまやきくらんこよろぎの
磯山遠くなくほとゝぎす

岬深隔舟

夏岬のしける汀のいつこにか
わかつる舟はつなきおきけん

垣朝貌

神垣のうらよりみれは葉かくれに
さけるも多し朝顔の花

曉更月

在明の月こそのこれぬは玉の
夜霧はれゆく山松の上よ

月夜待友

小車の音こそ門にとまりけれ
月にといひし人や來つらん

秋風漸寒

わかやとの壁のあれ間やつくろはん
秋風寒くなりぬ此ころ

閑庭霰

庭の面の落葉とともに積る日を
疎じてもふる霰かな

朝雪

とまり鷄の朝たつきしに有明の
月影なから積る白雪

雨中燈

ともし火のしめるをみれは敷妙の
枕の山そあめになりぬる

行舟夜已深

行舟も嶋山かげになりぬらん
夜深に松の音そ聞ゆる

富貴如浮雲

位山高ねの松にゐる雲も
風吹かぬまのさかえなりけり

まひこの濱に遊ひける時、鐵道線にあたれるところ〱松の樹のきりたふされたるをみて
心に思ふことありて

道のためたふるとならは姫こまつ
もとより千代も願はさるらん

坂上田村麿

梓弓やさかの上に照月の
影みちのくにあまりぬる哉

萬里小路藤房卿

龍の駒ひきとめかねしあしたより
雲井にすますなる心哉

豐太閤

藤衣しばしたゝすは唐綾も
やまと錦にあはせなましを

靜女

日のまへの千代のさかえも鶴か岡
そむきてなきし聲そみにしむ

湊川懷古

みなと川水はかれても天地に
あふるゝものは誠なりけり

單衣順母といへることを

唐衣うすきなさけに忍はすは
二葉の小松霜やおかまし

過魯祀聖といへることを

中絶し文の林の神まつり
再ひふるふすゝのおとかな

容諫賜金といへることを

花の枝撓めし風に山吹の
露の惠みもかゝりける哉

蜀帝孔明に孤を託するうた

おふるかひあらしの庭の撫子は
咲きもさかすも君かまに／＼

張巡と岳飛といつれかまされると
いふことをよませ給ふによめる

女郎花粟にあてしも花の香を
拂ひし旗の風にしかめや

拏破侖えるバ島にありし時の心をと
いへることをおほせことによりて

かくなからくたけん物か山をさへ
ぬきてかへりし沖つ白波

今様

紀元節

扶桑の海に浮びいでし、　朝日のひかりさながらに、
今もにほひて日の丸の、　國旗かゞやく　紀元節。

月の桂

立つや誰れ、學びの場に立つや誰れ、　螢は窓に雪は庭、
ひかりめでたき君が代に、　あひおひの松　姫小松、
松の操もかつみゆる、　千代田の宮の　御園生は、
文の林ぞ茂るなり、　詞の花もにほふなり、
天つ雲井の近ければ、　月の桂も手おるべし。



友人龍子の小說に引して亡き友を懷ふ

懷ひ出る毎に最と惜しく慕わしく感ずるは亡き友田邊次郎一君にてあり其才の秀で識見の非凡なりしとは中々に余が及ぶ所ろにあらねど但だ相愛すると云ふとにおては互に優り劣る所ろなかりき昔し嘗て小石川に船を浮べ君と共に月を賞して互に志を語りたるとあり、時に君十二、余れ十三にてありしが君は慨然として異日我國の產を殖し東洋の商業を振起せんと云へりしが余は愁然としてわれ才鈍し但だ文筆を以て一方に傾かんと約したりき其后君は支那に遊び英國に遊び多年の志望や、達せんとして俄然失せぬ才子短命の語不幸にして亦余が愛友の上にも落ち來りしなり爾來四年未だ一日も君を忘れず君を思ふ毎に當初相約したるとを思ひ出さずと云ふとなし余れ幸にして生殘れど志尙ほ少しも成らず況して君が遺恨する處の事を代り達するの道あらんや然るに君が愛妹は反つて文壇に於て余を敎ゆると多し君死して尙ほ余を顧みるものか噫然らば余も妹君と力を協せて日本の文事に些かの輔けだに爲ば君亦地下に笑み玉ふならん余は君が其莞爾たる笑顏を目前に見て轉た、悲しむ、今年閨秀の詩文を輯むるとき妹君辭して其作を出さず則はち君の事を申して強て之を請へり左に揭ぐるは亦君が之を誘へるものゝ如し友人善治幽明を隔て語る。

○蘆の一ふし

花園女史

上

御歸りといふ大喝一聲、あたりは更て森々としたる霜夜、例よりもさえて聞えたればか、寢できおさん迄も假寢したまゝのおびしどけなく、あたふたとかけ出すに隨て小間使の置洋燈片手に持て片手に玄關の障子おしひらけば靜に敷臺へおり立奥方と令孃とは三十あまりと十七斗瓜をふたつといふも大小あるべく菖蒲杜若とたとへんも其匂ことなりたゞおなじ薔薇のさき初んとするとはや末枯たるなど、やいひつべし顏細長くして眉こく眼間に鼻高くして口もといとちひさしその頬には幾らの愛敬の露をやたゝへつらん色はすき通やうに白く洋服きせて見ましかばとおもはるれどやはり從前の丸髷高嶋田心もとなげに今敷臺の前へ下りし車のうちのぞき込めば車夫はさむき夜とて心きかせてかおろしたる母衣とりのくれどおりたゝんともせぬ主人とみれば酒の臭氣たゞならずたわいなき高鼾常から力自慢の御三ともにたすけて車夫が敷臺へかゝへおろせば手早く前へ廻かた〳〵づゝ沓とり除る令孃と小間使最前敷ておいた床の上へ手どり足どりつれ來り洋服の儘寐せど正躰なし令孃はかなたらひとガラスに水八分目程つ

ぎ盆にのせ寶丹までとりそへて枕上へおくやうす手馴たる事とおぼしく各順序とゝのひたり下女二人はあたりかたづけて御機嫌よろしうとひきしりぞくあとに奥方と令嬢は寢衣きかへんとする折しも聞ゆるは二時の時計「チヤとともにいつて眠にやアと奥方は歎息しつゝ奥「サア〱早く御寢あさいヨ令「エヽあたりを見ながら保さんのよく寢てゐる事奥「學校でつかれるから令「なんだかめがさえて寢られさうもない奥「寢そゝくれたのだらうサア御寢さむくはあいかへといひながら夜着の肩のあたりたゝきつけておのれも横にはなれど寢れぬまゝしばらくたつと奥「お靜や寢たの令「イヽヘ奥「あした學校で寢いヨ令「チヤヽほんとにこのあいだ可笑くつて御午の時間に居眠りをしかけてお朋さんにおどかされてチヤヽさすがはわかき一徳草木も寢たる小夜中に氣樂らしい思出し笑奥方もニガ〱しげにほゝゑみながら奥「毎晩遲くつて困ねへ御前先へ寢ればいゝのにだが今晩もよつぱどめし上つたねへ一升じやアきくまいほんとに困る御躰にさはるからとさも心配さうに歎息をするを聞ば忽然わり〱とめにうかぶ父の姿二本の杖に結付草履あなやとめをふさぎ心をしづめてしばらくしてめをあけばほのぐらき行燈の火影そうちまもり枕に顏をあてながら寢らんともせぬ母の面おもはず顏を見合て「まだ寢ないの御寢といへば何か餘程心に思ひ餘るふしやあるらん常からものやさしき母の艶なき語同じ心にと思ば自然出るともなく出る涙見とがめられじと寢がへりして母にうしろをむけたれば母は今更ものたらぬ心地やすらん奥「御靜やよばれて面むきかへんとするもあやにくにしたゝる涙そと枕紙にふきて令「エ奥「あの森木さん御前おぼえて御出かへ令「若様の方─奥「ア、令「ちつとも奥「よく一所に遊んだがねへまだかたでねんねへだつたから、だがあちらは大さうりつぱあ方におありだとサ、お醫者様におありあんださうだが、たしかでいゝねへ、御父様はあんな御酒呑で、ふざけた方だが、いゝ方だし、新一さんは親御に似ないで、あんなまじめな方だし、こんな事はどうでもいゝけれど、厄介はあし、御金はあるし、ほんとにあんあ所へお前を遣つたら、どんなに安心だらう、御とつ様は仕方がないず、しらふの時がないのだもの、この間も局長と御口論をなさつたとサ、心配でならないねへ、御靜さうなるといゝだらうねへ、御靜モウ寢たのかへ令「イヽヘ、「いやな人だねへ、だまつてサ。かくて夜はまたくわけ放れて、かの女中等のみそ摺音、障子はたく音うす〱聞つと思まに、はや日もたけたれば、奥方も令嬢も驚きて飛起る、途端に御役所よりと下女がさし出す書状、奥方は主人ゆり

起し、「御役所から御用狀がまゐりました」「請取を遣ておけ、」「マアちよいと御覽遊ばせ」と、さしつくるに、是非なく起あがり、赤き眼を擦り〳〵、封じ口きつておしひろくる、やがて口に入るは非職の二字、いきなりに擲り出して、仰向に打倒れ、一本つけろ、バカメ、

中

「御うちにかと、いひつゝ入口の障子おしあけて入り來るは、よく〳〵心安き中なるべし、中には娘耳とくも聞つけ 娘「おとう樣あの橋渡さんが、といふをまたで、主人「ヤアズットこちらへと、聲かくれど、こちらあちらもなき六疊の書齋兼客坐敷、まだ太陽は障子三ッ口の棧まで、光線のさゝぬうちから、小鍋立の獨酌、客はまたかといふ顏をして、火鉢のむかふへ坐をしめ、やがて煙草入をぬき筒よりきせるとり出しながら、橋「どうも相かはらず、せいが出るね、奥さん其後は、やア毛糸編ですか、御孃さんあなたも御せいが出ますネ、だが君、困るねへ、此間もあれほど、主「チットたよりか、妻や娘がかれこれいふが、どうものまないと、ふさぎがくるから、「御尤サ、ダが實に難だからねへ、僕はすつかりやめたが、當人はいゝサ、それ丈自分が好なものを、のんで樂しむのだから、骸を損じても自業自得だから、妻子の身になると、こんな可相想な事はありやアしない、それも忘れて、酒と悄化するなんざア、愚の極點だ、酒不可飲とかいふ藥を用ゐてみたまへ、奥さん、あの發買者は、女ださうですが亭主が酒呑で、大さう苦勞をしたのださうです、奥「どうか、御ためしなさつちやアどうです、好なもので厶り升から、のんでくれるなでは厶りませんが、少し加減を致してくれますと、よろしう厶りますけれど、橋「實にさうですとも、主人公のあんどれ、別段わるい酒といふ方じやアないが、仕舞にやア酒酒を呑といふ流義だから、ときにあの森本の親父も、とう〳〵令息にすゝめられて、禁酒した、主「彼奴よしたのか、どう理で、しばらくこないと思つた、橋「又勸められて、煩惱が起ると、いけないからだらう、主「ダが、君、酒も酒だが、煙草だつて、中々害になるといふぢやアないか、橋「然しこれ許は、やめられない、主「アハゝゝ、ちやア、僕もこれ許はやめられない、二人「アハゝゝ、橋「これはしくぢつた、時にけふは笑談は笑談として、相談があつてきたのだが、あの森本の子息、しつてゐるかネ、主「ムゝ、しつてゐるとも、美少年だ、學術もよく出來

るさうだ、橋「あれがとあたりを見廻し、お孃さんあまり立つけに多辨つて、のどがかわいて、どうか水を一杯、恐れ入升がと、臺所へ立せて、言をつぎ、あれが御孃を是非てうだいしたいと、いふのですが、主「へー、それハ願つたりで、橋「と中もとから御性質ハしつてるし、家格、今度あの子息が、獨乙へ洋行をするのですが、しかる所官から御手當は多分に出るし、あの保さんを御同行申して、修行を御させ申て、主「保を、橋「ナニ保さんの天稟、實に遺傳とでもいふのか、先大人から君と、いふやうなわけで、實に非凡な所があるから、あつちで修行御させ申て、猶さら卞和の璧を磨き、連城の寶とし、先大人以來の恩を報じたいといふのは、親父が常からいつてる言葉だ、さうだが、平生の君の氣質もしつてるし、たゞ御連申すといへば、見さげた仕打とかなんとか、心にさへられてもといふ掛念から、ちようど適當な御緣だからいはゞ、許嫁とかなんとかいふ工合にしておいて、兄の資格を以て、御同行して、末には一臂の力にもなつて戴き度といふやうな、まづざつとかういふ咄しだが、隨分入込だ、むかふの心切も、無にあるまいし、君に於ても、あへて不承知といふ事もなからうとおもふが。主人は何と思ひけん、猪口も下に置、嘘にあまる露をたゝへながら、主「アゝ森本の義俠心も、かく迄とは思はなかつた、不承知所ではない、僕にはなにも言辭では禮をいひ盡せん、橋「それで僕も安心した、主「娘ももうかうなつちやア、英語や遊藝の、役に立所へは、とてもやられんと思つて、この頃じやア、おさんどんを修行最中、めしのたき方などは、うまくなつた、これもやつぱり局長様の御影ダ、アハ……、橋「あの局長も、君のきめつけたのはむりはない、出がいゝ許で、學問といつたら皆無ダ、君のいなくなつた後は、西洋からきた、雛形機械もなにがなんだかわからないで、急に工學士をよびにやるやら、大さわぎ、皆んな君をゝしんでゐる、君も當寮の時分にやア、一官廳の長官をつとめ、なんの守ともいはれ、開化の卒先者で、航海測量のことなどは、門下も大勢で、今は親任官になつたり、馬車のあとから護衛の車をわがゝせる、人物もあるが、主「モウよし玉へ、そんなことをいつたつて、仕方がない、橋「ダガ、くどいけれど、不平の凝かたまつたのだ、などゝいふのは最負目でいくら不平だつて、躰の、主「酒のことならよしてくれ玉へ、どうで毎日くよ／＼暮す位なら、君の御かげで、今日は一肩おろした、心持がするから、これからは、太く短く、橋「しやうがないネ、

僕は其內、又しかと取きめに來るから、奥さんも別段。先前から、ゑみまげて、聞ゐたるに、おんていなやのあるべきぞ、奥「まことにどうも何から何迄、おやにく保は居ませんが、どうか森本さんへよろしく、橋「では、御本人にも猶おあたから、御聞下さつてさやうなら、奥「マア、まことに御さう〳〵樣で、お靜は最前から起つ居つ、障子の外でもておましたる、一杯の水、漸もて出で、橋渡の前へさし出せば、これは〳〵といひて、立腰にうけ取ながら、じつと顔をみれば、パッとあからむ、おどけなさ、うつくしさ、世話がひありと、昇うでめかし、茶碗を下におけば、立上る二人、そのまゝその儘といひつゝ、下駄はきながら、橋「君どうか酒の事は手、可成ひかへめに、細く長く、キ「さういけばいゝが、二人「アハ、、、、

下

よこはまは、五港の一にしてど、幼き子も口くせのやうに、暗誦してゐる、土地の繁榮、立連らねたる燈火に、御國の光もかゞやきわたる心地ぞする、されど、けふ八重の汐路、行人を送る波止場のかなしさ、歸る人を迎る、うれしさ、さながら寄來る波は、この二種の淚あつめたりとも、見ゆめり、今しもこゝに車よりおり立は、森本新一お靜姉弟橋渡と學友のたれかれ、やがて艀にのりうつり、新一は學友と新聞や本で、ちか付になつた、人の噂や名所の咄し、豫想咄しに、餘念なし、これをうれしさうに聞ゐるは、保、側に御靜はうつむきて、折〳〵保に涙ながら、何かいひきかする程もなく、本船につけば、保はア、愉快だ、愉快だ、心配する事は、姉さんありやアしない、船は家のやうだ、大きいからど、勇み立、まづ一同に部屋を一見し、甲板にのぼれば、新一はあらためて、橋渡の前へ來たり、新「過日來、種々御配慮で、まづとゞこふりなく、然しのび〳〵になつて、保さんには都合がようムり升た、御親父の臨終にあつて、われも是非ない事でした、橋「あまりどうも急でしたから、あの朝倒れたきりにならうとは思ひませんでした、卒中はこわいもんです、やはり酒の爲です、それにこんどの事で、いくらか氣がゆるんだのでせう、新「アヽ是非ないこつてす、さぞ保さんにもわかれるし、未亡人の御心を察し升、どうか宅へ折々御遊びに御出になるやう、あなたからおつしやつては、御靜さん、おつか樣によろしく、あなたも切角、もう出帆に間がありませんど、いふ中に、碇をあぐる音、鐘の音、あたりの雜沓にまぎれ、御靜は夢中にはしごの所へ、橋渡の後に隨くれば、あとよ

り保は姉の手をとらへ、いつになく、慇懃に、保「じやア、どうかおつか様によろしく、御姉を大事に、姉さんも御壯健で、「ア、おまへさんも丈夫で、りつぱなものにおつてちやうだい、御酒を御のみあさるなョ、ほんとに二人切なのに、おどつ様に別れて。互に見合す顔、おもはずおとす一雫。橋渡は橋「サアこんな處で、あぶないと、手をひいて艀にのりうつれば、はげしく聞ゆる蒸氣の音、白波け立てゝ行船の、甲板に力限り帽をふるは保、おだやかに白き半布ふるは新一、こなたの艀にも、半布やら帽やら、船もかたむかんずさわぎ、御静はしばしだにかの船見はなたじとおもへば、はふり落る涙ふくまもおしく、あなたのみ見つめて、身動きもせねど、次第〳〵に此方の、艀が波止場にちか付につれて、あおたの船も進むともなく進み、おのかけぶりの跡に、…………御静はこの後ある學校に行通ひて、勉學おこたらず、ともにうたはん高砂や、この浦風に帆をあげて、歸朝せん日を待つゝありとぞ。



○忘れ形見

若松しづ子

ミス、プリクトルの"The Sailor Boy"と云ふ詩を讀みまして、一形ならず感じました、どうか其心持をと思ふて物語り振りに書綴つて見ましたが、固より小說おど云ふべきものではありません。

あなた僕の履歴を話せつて仰るの？話し升とも、直つき話せつちまい升よ、だつて十四にしかならあいんですから、別段大した悦も苦勞もした事がないんですものを、ダガチ、モウ少し過ぎると僕ハ船乘になつて始めて航海に行んです、實に樂みあんです、どんな珍敷ものを見るかと思つて……、段々海へ乘出して行中には、爲朝なんかの樣に、海賊を平らげたり、虜になつてるお姫さまを助ける樣な事があるかも知れませんからね、それから、ロビンソン、クルーソー、みた樣に、難船に逢つて一人ッ切り、人跡の絕えた島に泳ぎ着なんかも、隨分面白かろうと考へるんです。

これまでは、ズット北の山の中に、德藏おぢと一處に居たんですが、其まへは、先の殿樣ね今では東京にお住ひの從四位樣のお城迹を番してゐたんです、足利時代から在たお城は御維新のあとにお取崩しにおつて、今じや塀や築地の破れを蔦桂が漸く若ものを着せてる位ですけれど、お城に續てる古い森が大層廣いのを、幸ひ其後鹿や兎を澤山にお放しになつて、

遊獵場に變へてお仕舞なさり、又最寄の小高見へ別邸をお建になつて、毎年秋の木の葉を鹿がさつかせると云ふ時分、大したお供揃に獵犬や馬を引せてお下りになつたんです、入つしやれば大概二週間位は遊興をお盡しなさつて、其間は、常に寂そりしてる市中が大そうな賑になるんです、お歸りのあとはいつも火の消た樣ですが、此時の事は、村のもの丶一年中の話の種になつて、あの時はどうで有たこふで有たの雜談が、始終盡ない位でした。

僕はまだ少さかつたけれど、あの時分の事はよく覺へてゐ升よ、サアお出だといふお先振があると、昔し堅氣の百姓たちが一同に炬火をふり輝らして、我先と二里も三里も出揃つてお待受をするのです、やがて二匹引の馬車の轟が聞へると思ふと其内に手綱を叩させて緩々お乘込になる殿と奥樣、物慣ない僕たちの眼には余ぽど豪氣に見えたんです、其殿樣といふのは嚴そうで中々傲然と搆へたお方でお口通りが出來る處ではなく、御門をお通りになる度毎に德澁もぢが「こはいから隱れていろ」といひ〳〵しましたから、僕は急いで木の影やなんかへかくれるんです。ですが其奥さまといふのが僕の爲にはなんとも云ない好方で、其方の事を考へても、話にしても、何だか妙に嬉敷樣な悲敷樣な心持がして來るんです、美人といへばそれ迄ですが僕はあんな高尚な天人の樣な美人は見た事がないんです、先下々の者が御挨拶を申上ると、一々しとやかにお請をなさる其柔和つてどこか、悲敷そうな眼付は、夏の夜の星とでもいひそふで、心持俯向て入しやるお顏の品の好さ！しかし奥樣がどことなく淋れて入つて恍惚なすつた御樣子は、トント嬉敷かつた昔しを忍ぶとでもいひそうで、折ふしお膝の上へ乘せてお連になる若殿さま、これがまた見事に可愛い坊樣なのを、ろく〳〵お愛しもなさらない擧動、なぜだろうと子供心にも思ひました。

近處のものは折ふし怪しからぬお噂をする事があつて、冬の夜、爐の周圍をとりまいては不斷こはがつてる殿樣が閙爭めでもなさるかの樣に、つむりを集めて潜々聲に、御身分違の奥さまをお迎ひなさつたといふ話しを、殿のお家柄にある間敷瑕瑾の樣にいひました、此噂を聞て「それは嘘だ、殿に限つてそんな白痴をなさろう筈がない」と云罵しるものもありましたが、又元奥さまを知つてゐた人から直に聞たつて、一々ほんとうだと云張る者さへあつたんです、其話といふはこうなんです。

人の知れない遠い片田舍に、今の奧さまがまだ新嫁で居らしつたころ、一人の緑子を形みに殘して、契合た夫が世をお去り

なすつたので、跡に一人淋敷詫住みをして入しつた事があつた相です、流石の美人が憂に沈でる有様、の白さうびが露に惱むとでもいひそうな風情を殿がフト御覽になつてからは、優に妙なお容姿に深く思ひを寄られて、子爵の御名望にも代られぬ御執心と見えて、行つ戻りつして躊躇つて入しやるうちに遂々奥方にと御所望なさつたんださうです、處が彌子爵夫人の格式をお授けになるといふ間際、まだ乳房にすがつてる赤子を「けふよりは手放して以後親子の縁はなきものにせい」といふ嚴敷お掛合があつて涙ながらにお請をなさつてからは今の通り、やん事なき方々と居並ぶ御身分とおなりなさつたのださうです。處があの通り此上もない出世をなすつて、重疊の幸福と人の羨むにも似ず、何故か始終浮立ぬ樣におくらし成るのに不審を打ものさへ多く、それのみか、御寵愛を重ねられる殿にさへろく〳〵笑顔をお作りなさるのを見上た人もないとか、鬱陶敷そうにおもてなしなさるは、お側のチンも子爵樣も變た事はないとお附の女中が申たとか、マアとり〳〵に口賢なく雜談をしました。徳藏おぢがこんな噂をするのを聞てもしよふもんなら、いつも叱り止るので、僕なんかは聞ても聞流にしちまつて、人に話した事もありません。

徳藏おぢは大層な主人おもひで、格別奥さまを敬愛してゐる樣子でしたが、度々林の中でお目通りをしてる處を木の影から見た事があるんです。そふいふ時は、徳藏おぢは、いつも畏つて奥樣の御用事を承つてゐる樣でした、勿論何のことか判然聞取なかつたんですが、ある時晒さす夕日の光線が、樅の木を大きな篝火にして、それから枝を通して薄暗い松の大木にもたれて入しやる奥さまのまわりを眩く輝かせた殘りで、お若衣の裾を、狂ひ廻り、序に落葉を一と燃させて行頃、何か徳藏おぢが仔細ありげに申上るのをお聞なさつて、チヨツト俯向におなりなさるはづみに、はら〳〵と落る涙が、お手にお持なさつた一と房の花の上へかゝるのを、たしかに見た事があるんですが、これをおもへば、徳藏おぢの實貞な處を愛て、深い思召のある事をおほせにでもなつたものと見え舛。おもへばあの樣に陰氣で冷淡そうな方が僕の樣なものを可愛がつて下さるのは、不思議な樣ですが、ほんとうにそうなんでした。よく僕は奥さまの仰やる通りに、頭をお胸へよせ掛て、いつ迄か抱れてゐると、チツト顏を見つめてゐながら、色〳〵仰つた其お言葉の柔和さ！それからトンと赤子でもあやすやうに、お口のうちで朧ろにおつしやることの懷かしさ！僕

は少さい内からまぢめで靜かだつたもんだから、近處の人があたりまいの子供のあどけなく可愛い處がないといひ／＼しましたが、どふしたものか奥さまは僕を可愛やとおつしらぬばかりに、しつかり抱〆て下すつたことの嬉しさは、忘れられないで、よく夢に見い／＼しました。僕はモウ先ッから孤になつてたんだろうて、お袋なんかはちつとも覺へがないんですから、僕の子供心に思ふ事なんざあ、聞て呉る人はなかつたんですが、奥さま斗りには、なんでも好なとがいへたんです「いゝからどんなとでもかまはずお話し」と仰しやるもんだから、おめに掛つた其日は木登りをして一番大きな枝ぼつくりを落したといふ樣な事から、いつか船に乘つて海え行つて見度なんていふ事まで、いつちまうと、面白がつて聞てゐて下すつたんです。

時々は夢に見たつて色々不思議な話しをして下すつた事がありました。其お話しといふのは、ほんとうに有そうな事ではないんでしたが。奥さまの柔和くつて、時として大層哀つぽいお聲を聞斗りでも、嬉敷のでした。一度なんぞは、ある氣狂い女が夢中に成て自分の子の生血をとつてお金にし、それから鬼に誘惑されて自分の心を黄金に賣拂たといふ、恐敷お話しを聞て、僕はおつかなくなり、青くなつて震へたのを見て、「矢つぱりそれも夢だつたよ」と仰つて、淋敷そうにニツコリなすつた事がありましたつけ。

マアどれほど深切で、美敷くつて、好い方だつたか、僕は話せない位ですよ、話せればあなただつてどんなに好におなんなさるか！。非常に僕を可愛がつて下すつたとを思ひ出してさへ、なんだか涙が眼に一杯になり升、モウ先ッのとだけれど、きのふけふの樣に思はれ升よ、ホラ晴た夜に空をジットと眺めてると、始めは少しゝか見えなかつた星が、段々いくらも／＼、見えて來升ナイ、丁度そういふ樣に、ぼんやり覺へてるあの時分のとを、考れば考る程色々新敷ことを思出して、今そこに見えたり聞えたりする樣な心持がし升。いつかフト子供心に浮んだことを、たわいなく「アノ坊なんぞも、若さまの樣に可愛らし敷なりたいナ」と云ましたら、奥さまが妙に苦々敷笑ひ樣をなすつて、急に改つて、乾ばりと「マアぼうは、そんなとを決していふのじやありませんよ、坊はやつぱり其まゝがわたしには幾ら好のか知れぬ、坊の其嬉しそうな目つき、其まじめな口元、ひとつも變度處はありませんよ、あの赤ぼうは奇麗かは知りませんが、アノ從四位樣のお家筋

に坊の氣高い器量に及ぶ者は一人もありません、兎に角坊はソックリ其儘、わたしの心には、あの赤んぼうよりか、だれよりか可愛くつてならないのだよ」とおつしやつて、少し沈默て入しやると思つたら泣出して、「坊はネ、善お聞よ、先におなくなりなすつて、遠方ッの墓に埋られて入しやる方に、似てゐるのだよ、坊もネ其方の通りに、緩大して、やさ敷て、剛勇くなつておくれよ」。こふ聞て譯もなく悲敷なつて、すゝり泣しながら、また何氣なく、「アヽ其墓に埋つてる人は殿さまの樣にゑらいお方?」といふと、さも見下ゲ果たといふ樣子を口元にあらわして、僕の手を思ひ入れ握〆、どふして〳〵、お死になされたとわたしが申た愛と敷お方の側へ、從四位樣を並べたら、まるで下郎を以て行た樣だろうよ」と、仰つてまた鳥渡口を結び、力のなさろうな歎息をなすつて、僕のあたまを撫ながら、「坊もどふぞあの通りな立派な生涯を送つて、命を終る時もあの樣にいさぎよくなければなりません、眞の名譽と云ものは、神を信じて、世の中に働くとにあるので、眞の安全も滿足も此外に得られるものでないと、つねづね仰つたとを、御遺言として、記臆ておいで」と、心を一杯籠めて仰つたのを、譯はよく分らないでも、忘れる處か、今

そこでうかゞつた樣におぼえてゐるんです。

いつかはまた、鳥渡した子供によくある熱に浮されて苦しみながら、ひるの中は頻りに寐反りを打つて、シク〳〵泣てゐたのが、夜に入つてから少しウッ〳〵したと思つて、フト眼を覺すと、僕の枕元近く奥さまが來て入しつて、折ふし霜月の雨のビショ〳〵降る夜を侵して入しつたものだから、見事な頭髮からは冷度雫が滴てゐて、氣遣はしげなお眼は、涙にうるんでゐました、身動をなさる度毎に、邊りを輝らす樣な寶石が、お胸の邊やおぐしの中にてピカ〳〵してゐるのは、なんでもどこかの宴會へお出になる處であつたのでせう。奥さまの涙が僕の顏へ當つて、奥樣の頰は僕の頰に壓ついてゐる中に、僕は熱の勢か妙な感じがムラ〳〵と心に浮んで、「アヽ〳〵おつかさんが生て入しやれば好いにネー」といふのを、德藏おぢが側から、「だまつてねるだアよ」といひましたつけが、奥さまが「坊はわたしが床の側についてゐて上れば、おんなじじやないか」と仰つたのを、僕が又臆面なく「エーあなたも大變好だけれど、あんなじじやないわ、だつておつかさんは、そんな立派な光る物なんぞ着てる人じやなかつたんだものを」といふと、それは〳〵急にお顏色が變つたこと、

ワットお泣なさつた其お聲の悲そうでしたこと、僕はあんなに身をふるわしてお泣なさる樣な失禮をどふして云つたかと思つて、今だに不思議でなりませんよ、そして其夜は、明方まで、勿躰ないほど大事にかけて看病して下すつたんです。

しかし僕はあなたが聞て下さるからつて、好氣になつて、際限もなく話しをしてゐたら、退屈なさるでせうから、いゝ加減にし升が、モ一ッ切り話しませう、僕は此時の事が悲歎といへば實に何んともいへないほど悲歎んですが、又どことなく嬉敷樣な處もあつて、判然記臆てゐるんです。丁度しわすのもの淋敷夜の事でしたが、吹すさぶ其晩の山おろしの唸る樣な凄い音は、今に思出され升、折ふし德藏おぢは、椽先で霜に白んだ樅の木の上に、大きな星が二ッ三ッ光てゐる寒空を、眺めて、いつもになく、ひどく心配そうな、いかにも沈んだ顏付をしてゐ升たつけが、いつか僕のゐる方を向て、「ナニ、、奥さまがナ、えらい遠方へ旅に行しつて、いつ迄も歸らしやらないんだから。逢に來うつて呼によこしなすつたよ」と、氣のなさろうに云ました、何か仔細の有そうな樣子でしたが問反しもせず、德藏おぢに連られるまゝ、ふたりともだんまりで、遠くもない御殿の方へ出かけて行ましたが、通て行林の中は寂して、ふたりの足音が氣味わるくこ玉に響く斗りでした。やがて薄暗い樣な大きい御殿へ來て、邊の立派なのに肝を潰し、語へばどこ迄もひゞき渡りそうな天井を見上ても、おつかなく、ヒヨット殿さまが出て入しつたらどうしようと、おそる〳〵德藏おぢの手をしつかり握りながら、テカ〳〵する梯子段を登り、長いお廊下を通つて、漸く奥樣のお寐間へ行着ましたが、どこからともなく、ホンノリと來る香の薫り床敷、態と細めてある行燈の火影幽かに、室は薄暗がりでしたが、爐に燒く火が、僅か燃殘つて、思ひ掛けぬ時分にパット燃上つては廻りを急に明るくすると思へば、また俄かに消失せて、元の薄暗がりになりました。僕は氣味わるさに、只そこゝと見廻してゐる斗りでしたが、「モット側へおより」と德藏おぢに云われて、オヂ〳〵しながら二ヶ足三足、奥さまの御寐なつてるほうへ寄ますと、橫になつて入らしやる奥樣のお顏は、トント大理石の彫刻の樣に青白く、靜かな事は寐つて入しやるかの樣でした。僕は其枕元にックチンとおつけにとられて眺めてゐると、やがて恍惚とした眼を開てフト僕の方を御覧になつて、始て氣が着て嬉敷といふ風に、僕をソット引寄て、手枕をさせて橫に寐かし、何か云ふとして云兼る樣に、

出そうと思ふ言葉は一々長い歎息にあつて、心に疊まつてる思ひの數々が、胸に波を打たせて、僕をヂツト抱〆やうとして、モウそれも叶わぬ程に弱わつたお手は、ブル〳〵震へてゐましたが、やがて少し落着て……、落着てもまだ苦しそうに口を開て、神に感謝の一と言「神よ、オヽ神よ、日々年々の此下女の苦痛を、哀れとみそなわし、小兒を側らに、臨終を遂させ玉ふを謝し奉つる、いと淺からぬ御惠も、下女の罪と苦痛を除き、此期におよび、慈悲の御使として童を、遣し玉ひし事と、深く信じて疑わず、いと〳〵かしこみ謝し奉る」。祈り終つて、聲は一層幽に遠くあり、「坊や坊には色々申し殘し度とが有が、時迫て……何もいへない……ぼうはどふぞ無事に成人して、此後どこへ行て、どの樣な生涯を送つても、立派に眞の道を守つておくれ、わたしの靈はこゝを離れて、天の喜びに趣ても、坊の行末によつては滿足が出來ないかも知れません、よつくこゝを辨へるのだよ……」。仰つて、いまは、透ゝ通る樣なお手をお組なされ、暫く無言で入しやる、お側へつゝ伏して、普段敎へ下すつた祈願の言葉を二た度三たび繰返して誦へる中に、ヅートよくお寐入なさつた樣子で、おとは身動きもなさらず、寂りした室内には、何の物音もなく、たゞ彼の暖爐の明滅が凄さを添へてる許りでした。子供ながらも其塲の嚴かな氣込に感じ入て、たゝづんだまゝでゐた間はどの位でしたか、其の內に德藏おぢが奥さまはモウおなくありなさつたから、お暇しなければならない、見納にモウ一度お顔をよく拜んでおけ」と聲を曇らして云ました。僕は死ぬるといふ事はどふいふ事か、まだ判然分らなかつたのですが、此時大事なく〳〵奥さまの靜かに眠つて入しやるのを、迹に見て、すゝり泣しながら、德藏おぢに手を引れて、外へ出た時、始めて世はういものといふ、習ひ始めをしました。

これからあと直に、德藏おぢはお暇を願つて、元と出た自分の國へ引込ました、德藏おぢはモウ年が寄つて、古郷を離れる事が出來ないので、七年といふ實に面白い氣樂な生涯をそこで送り、極おだやかに往生を遂る時に、僕をよんで、これからは兼て望の通り、船乘りにあつても好といひました。僕は望が叶んだから、嬉敷ことは嬉敷けれど、こゝを離れて行となると、何だか心殘りです、ですが僕はこんなに氣樂に見えても、あの樣に終りまで心にかけて僕の樣なものゝ行末を案じて下すつた奥さまに對して、是非潔い勇ましい人物にならなくつてはならないと、始終考へて居るんです。

（完）。

改進新聞改良廣告

全世界の大勢を知り政治の得失を鑑み社會の趨勢を察し實業の氣運を査し文學の粹美を味ひ美術の眞相を觀んと欲するものは改進新聞を讀め

● **改進新聞**ハ**廿三年一月一日より年中休刊なし**

● **改進新聞**ハ**爾來隔日に大附錄を添ゆべし**

● **改進新聞**の論説は諸名士交も筆を取るとを約す其論ずる所は硬直讜議を旨とし其意は高尚愷切其文は平易穩當なり改良の日を待つて其誣ゐざるを知れ

● **改進新聞**の主義は改進主義を堅守して動かず然れども所謂改進黨の機關にあらず其論旨中正獨立の本色を全ふすべし

● **改進新聞**は改良の主意に基き大に記者客員通信員及社員を増加せり其記事は公平無私精確迅速を旨とし專ら批評の粹を拔き正面よりは國家を經綸し側面よりは社會を黼黻するを以て目的とす

● **改進新聞**の少説は夙に江湖の喝采を博したり爾來之に安んぜず優粹精美を萃め有益多樂を萃め期する所は文學の明鏡と爲り文華の模範とならずんば已まざるなり

● **改進新聞**は苟くも世を益する書圖及び表類を得ば直に之を石版若くは銅版の印刷に依り臨時に附錄を添ゆべし

● **改進新聞**の定價は一ヶ月前金三十錢三ヶ月前金八十五錢とし又本社より各地方へ日々直郵送の分は郵税を合せ一ヶ月前金四十錢同三ヶ月前金一圓十五錢とす

● **改進新聞**の賣捌所は全國各地にあり發送は毎日一番汽車便に附す若し遲延の向あらば一報を乞ふ

㊤ **改進新聞**は本月廿七日には歳暮として例の緻密精細なる統計重寶の一大附錄を刷行し猶又廿三年一月一日には歳旦の祝意を表せん爲め皇族諸大臣元勳四十有餘名の肖像を寫したる石版畵大附錄及宮中古儀式(古實家川崎千虎翁の筆)の大附錄を添ゆ而して此歳暮歳旦兩樣大附錄は一ヶ月以上購讀御申込(直に本社へ)の諸君に今後とも相添へ差上可申候

● **改進新聞**の廣告は刷行部數の府下諸新聞に挺んずるが故に其實効を奏するの著明なると從來依賴者の經驗に徴するも亦本紙廣告欄内の常に充溢するに依るも知るべきのみ依て本社は其眷顧に報んが爲め自今實益有用の廣告と認定するものゝある時は特に雜報欄内を割愛して之が吹聽を爲すに吝ならざるべし實業者の如きは特に此の一項に着目せらるべきなり

本局　東京市京橋區南鞘町六番地　**三益社**

女生徒募集公告

本校ハ一月八日始業豫科一年生ヨリ各級ヘ入學ヲ許ス志願者ハ至急申込アレ規則書望ノ者ハ郵券二錢ヲ添ヘ御通知アラハ直ニ送附ス

月　日

京橋區築地新榮町六丁目四十二番

新榮女學校

女學雜誌社書出版目

鈴木弘恭大人著述○小中村清矩大人評
文法口授 全一冊 價金十六錢

世良太一吳文聰兩君序○横山雅男君著
婚姻論 全一冊 價金二十五錢

田口卯吉君結髮沿革附錄○岩本善治君跋
和崎義路君校○渡邊鼎君著
東髮案内 全一冊 價金十錢

船越鼎太郎君著
産婦小兒 **攝生法** 全一冊 價金十八錢

鈴木弘恭大人講述○山村亮作君筆記
徒然草講義 全一冊 價金十錢

巖本善治編
木村鐙子小傳 全一冊 價金十錢

中島俊子女史著
善惡の岐 全一冊 價金三十五錢

關輪正路君纂著○木村熊二田口卯吉兩君序
女子必携 **今世姫鑑** 全一冊 價金五十錢

巖本善治君序○華族女學校教授津田梅子女史題辭
高橋五郎君述
女權眞說 全一冊 價金十五錢

八木兼辰先生著
東洋畫手本 二帖 價金六十錢

女學雜誌社編輯
材料新誌 八冊 價金六十四錢

佐々城豐壽女史譯
婦人言論の自由 全一冊 價金十錢

中島湘煙女史序○安東松三郎著
慈善叢書 **貧兒の教育** 全一冊 價金十五錢

湯淺はつ子編
倫理の基 全一冊 價金二錢

植木枝盛先生著
東洋之婦女 全一冊 價金四十錢

女學雜誌社編輯
通信女學 **講義錄** 十五冊 價金壹圓五十錢

巖本善治著
妓樓全廢 全一冊 價金五錢

井上藤平編
猫と鼠 全一冊 價金十錢

植木枝盛、島田三郎兩氏述
廢娼演說 全一冊 價金五錢

麴町區富士見町二丁目一番地

女學雜誌社

女生徒募集公告

本校は一月八日始業豫科一年生より各級へ入學を許す志願者は至急申込あれ規則書望の者は郵劵二錢を添へ御通知あらば直ちに送附す

明治二十三年一月

京橋區築地新榮町六丁目四十二番

新榮女學校

◯◯女生徒募集廣告

今般學期試驗を終り來一月十日始業す入學志願者ハ至急申込むべし寄宿志願の向ハ前以て通知ありたし

麴町區上六番町十七番地

開成女學館

交詢案内

（催促する勿れ委細に申來れ郵劵十錢送れ）

●雇ひたき方（甲）

- 二一　中働　年齡廿五才にして一ト通り裁縫の出來るものを一圓以上の給金にて雇ひ度處あり
- 二五　召使　十二才以上の小女にて實直なるものを給料一圓にて雇入度處あり

●雇はれたき方（乙）

- 二四　奉公　年齡廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
- 二五　裁縫　裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御内に教師に雇れたし
- 二八　奉公　普通小學科卒業の者にて（年齡二十二才）産婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ餘暇に産婆術を學び度ものあり
- 二九　奉公　年齡十四歲にて基督教信徒の家（可成は西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き毎日四五時間英語學の修業致したし
- 三五　奉公　年齡十五才の高等小學卒業生にして餘暇に勉學の出來候御宅へ雇はれ度ものあり但し給料は望みなし

●喜びのめぐみ

召使　甲第二十四號は去る二日雇入され爲れり

看護婦生徒募集

本社看護婦生徒募集候條志望ノ者ハ廿三年一月三十一日迄ニ本社病院ヘ申込ムヘシ但シ年齡廿歲以上三十歲以下ニシテ獨身健康ノ者ニ限ル尙規則幷手續等ハ本社病院ニ就テ承合スヘシ

明治廿三年一月

麴町區飯田町四丁目卅一番地

日本赤十字社

謹て新年を賀し併せて愛顧諸君の淸福を祈る

神戸市元町四丁目中程

福音社

定價

一册。	六錢	郵稅。五厘	（但府內無郵稅）
十册。	五十八錢	郵稅。五厘	（同前）
半年分	一圓四十三錢	府外は	一圓五十六錢
一年分	二圓六十錢	府外は	二圓八十六錢

廣告

一行（廿七字詰）	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌ハ今後女學校又ハ婦人會杯ヨリ毎發兌十册以上一纏ニ御注文ノ別ニ十册毎ニ一册ハ無代ニテ進呈可仕候

明治廿二年十二月廿一日印刷
明治二十三年一月一日出版

東京麴町區富士見町二丁目一番地

發行所　女學雜誌社

編輯兼發行人　東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留　巖本善治

印刷人　東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留　森田豐